若者の仮想的有能感の認知と
怒りおよび悲しみの情動生起との関連

（課題番号　15530423）

平成 15・16・17 年度科学研究費補助金基盤研究(C)
研究成果報告書

平成 18 年 2 月

研究代表者　　速　水　敏　彦
（名古屋大学・大学院教育発達科学研究科・教授）

研究組織

研究代表者:速水 敏彦(名古屋大学・大学院教育発達科学研究科・教授)

研究分担者:木野 和代(広島国際大学・人間環境学部・助手)

研究協力者:高木 邦子(名古屋大学・大学院教育発達科学研究科・研究生)

研究経費

平成 15 年度	800 千円
平成 16 年度	2000 千円
平成 17 年度	900 千円
計	3700 千円

研究発表

(1) 学会誌等

①速水敏彦・木野和代・高木邦子　仮想的有能感の構成概念妥当性の検討　名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（心理発達科学）第 51 巻　2004 年 12 月 27 日

② Toshihiko Hayamizu, Kazuyo Kino, Kuniko Takagi, and Eng-Hai Tan　Assumed-competence based on undervaluing others as a determinant of emotions: Focusing on anger and sadness. Asia Pacific Education Review, Vol5, No2　127-135. December 30, 2004

③速水敏彦・木野和代・高木邦子　他者軽視に基づく仮想的有能感―自尊感情との比較から―　感情心理学研究　第 12 巻　第 2 号 43-55. 2005 年 9 月 30 日

(2) 口頭発表

① Toshihiko Hayamizu, Kazuyo Kino,and Kuniko Takagi Assumed-competence based on undervaluing others. 8th European congress of psychology (Poster presentation) July 10th, 2003

②速水敏彦・木野和代・高木邦子　日本教育心理学会第 45 回総会自主シンポジウム　「仮想的有能感」をめぐって　発表論文集 s46-s47　2003 年 8 月 23 日

③木野和代・速水敏彦・高木邦子　怒り－悲しみと仮想的有能感　日本感情心理学会第12回大会　2004年5月16日

④高木邦子・速水敏彦・木野和代　仮想的有能感尺度の妥当性検討　日本教育心理学会第46回総会発表論文集　33　2004年9月9日

⑤木野和代・速水敏彦・高木邦子　仮想的有能感の発達的変化　日本教育心理学会第46回総会発表論文集　34　2004年9月9日

⑥木野和代・速水敏彦・高木邦子　青年の日常的な感情経験と仮想的有能感　日本感情心理学会第13回大会　2005年5月15日

⑦高木邦子・速水敏彦・木野和代　有能感タイプと日常生活に対する評価　経験抽出法（ESM）による検討　日本社会心理学会第46回大会発表論文集　381　2005年9月25日

目　次

はじめに …… 1

研究1　仮想的有能感尺度の作成と構成概念妥当性の検討 …… 3

研究2　仮想的有能感および自尊感情と成功・失敗経験
ならびに一般的怒りとの関係 …… 16

研究3　青年の有能感タイプと日常生活の感情経験
－経験抽出法（ESM）による検討－ …… 34

研究4　The effects of ages and competence types on
the emotions: Focusing on sadness and anger. …… 49

今後の展開 …… 72

はじめに

本報告書は平成15-17年度の3年間にわたってなされた「若者の仮想的有能感の認知と怒りおよび悲しみの情動生起との関連」の研究をまとめたものである。

「仮想的有能感」というのは研究代表者の造語であり、実はこの言葉をめぐっての啓蒙書を最近、「他者を見下す若者たち」（講談社現代新書）のかたちで著した。この書の一部を引用して他者軽視に基づく仮想的有能感を説明すれば以下のようになる。

「現代の日本人は自由な社会が当たり前のこととして誰も彼もが横行闊歩しているように見える。その自由さは利己主義を強め、『ジコチュウ』という言葉も生まれた。これが高じれば、人は自分ばかりをみて、他人をみなくなる。つまり以前に比べて人々は他者軽視・軽蔑をいとも簡単にするようになる。この他者との関係の捉え方が自分自身の捉え方にも影響を及ぼし、さまざまな出来事の際に生じる感情ややる気のあり方そのものを規定するのではないかというのが筆者の仮説である。

今、人と人との親密なつながりが消失する現実の中で、誰もが体面を保ち、個を主張して生きていくことが求められている。だが、少子化の影響で小さい頃から大切に育てられ、苦労をせず、楽しいこと、面白いことに浸ってきた若者にとって見知らぬ社会を一人だけで歩いていくことは恐怖でもある。欲しいものを何でも買い与えられ、有り余る時間を自分のためだけに使ってきた人たちが、厳しい現実の競争社会の中でまともに生きていくことは難しい課題である。

しかし、実は彼らはそれを乗り越える方法をいつのまにか取得してきたようにも見える。おそらく、それは本人自身もあまり気づいていない無意識的なもので、個人主義文化を担った人たち、さらには、ITメディアの影響を受けた人たちがいつのまにか身につけた**仮想的有能感**とでも呼ぶべきものである。これは先ほど述べた他者軽視をする行動や認知に伴って本人が感じる瞬時な『自分は他人に比べてエライ、有能だ』という習慣的な感覚である。

現代人は自分の体面を保つために、周囲の見知らぬ他者の能力や実力をいとも簡単に否定する。世間の連中はつまらない奴らだ、とるに足らぬ奴らだという感覚をいつのまにか自分の身に染み込ませているように思われる。そのような他者軽視をすることで、彼らは自分への肯定感を獲得することが可能になる。一時的にせよ、自分に対する誇りを味わうことができる。

このように若者を中心として、現代人の多くが他者を否定したり、軽視することで無意識的に自分の価値や能力を保持したり、高めようとしているよ

うに思われる。しかし、この仮想的有能感はやっかいな代物である。現実には、特に負け組みになりそうな人々が生き抜くためには必須の所持品ではあるが、他者軽視をすることで、社会に様々な弊害を生じさせることが懸念されるからである。」

さて、この仮想的有能感の個人差を測定するための尺度づくり（Version 1）をまず行った。これが研究１で示されるもので、すでに本学の紀要に掲載されたものである。尺度の構成概念妥当性に関しても検討を加えている。

研究２では、仮想的有能感はいわゆる自尊感情とはまったく独立した概念であることを過去の成功・失敗経験および一般的怒りとの関係から明らかにした。仮想的有能感は自尊感情のように成功経験に伴って増加したり失敗経験に伴って減少したりするものではないこと、また、特性的怒りや怒り表出、怒りを内に溜める傾向は仮想的有能感が高いほど強いことが明らかにされた。この研究も既に感情心理学研究に発表されたものである。

研究３は今回の研究費の大半を使ってなされたもので経験抽出法によって大学生の感情を測定し、彼らの有能感タイプ（仮想的有能感と自尊感情を組み合わせたもので、両者が高い場合は全能型、仮想的有能感だけが高く自尊感情が低い場合は仮想型、逆に仮想的有能感が低く、自尊感情が高い場合は自尊型、両方とも低い場合は萎縮型とした）との関係をみたものである。なお研究３と研究４では仮想的有能感を測定する場合に Version1 の改訂版である Version2 を使用している。また、この研究３の結果については、口頭発表はしたが論文として公表はしていない。

研究４は先の有能感タイプが年齢とともにどのように変化するか、また悲しみ一怒りの感情とどのように関係しているのかを検討したものである。現在、英文雑誌に投稿中のもので、投稿原稿をそのまま掲載している。

研究１　仮想的有能感尺度の作成と構成概念妥当性の検討

問　題

人は誰も基本的には有能でありたいと願いながら生きている。それは、人間がよりよく生きていくために本来的にそなわったものかもしれないし、社会が人々に様々な領域での有能さを求めているからだともいえる。学校で有能であること、職場で有能であること、あるいはインフォーマルな集団の中でさえ、有能であることは当事者のみならず、集団の仲間が求めていることでもある。そして、有能であることで本人自身の満足感、幸福感を招来することができる。

しかし、世の中は誰もが有能さを享受できるような仕組みにはなっていない。有能さを享受できるのはごく一部の人間で、その他の多くはむしろ無能さを体験する場面に遭遇することが少なくない。かといって人間社会で幸せに生きていく以上、人は無能のままでよいというわけにはいかない。そこで人はさらに有能感を求め続ける。

ところで、特に個人主義が浸透した社会の中で人々の人間関係は希薄化し、親密な関係を形成することが少なくなった。そのような中で他者の行動を傍観者的に眺め、少しでも失敗や落ち度があれば、批判したり非難したりすることが現代人には増加しているように思われる。香山リカ(2004)によれば、現代の若者には「バカだといわれたらどうしよう、「負け組」になってしまったらどうしよう」という「不安」が自らの内側にあるために、先に相手に「バカ」「負け」と攻撃して「自分はそうじゃない」と確認しようとするのだという。そのような他者の能力の軽視が実は自分の仮の有能感を回復させることに繋がっているように思われる。先に述べたように現実的な有能感が十分にえられないことで人は無意識的に他者軽視を通して有能感をえようとしているのかもしれない。しかし、そこでえられる有能感は所詮、真実でない、仮想的な有能感なのである。

そこで、本研究では、「仮想的有能感」という新たな概念を提案する。仮想的有能感を定義すれば「自己の直接的なポジティブ経験に関係なく、他者の能力を批判的に評価、軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚」とまとめることができる。他者を軽視することは一種の他者評価で仮想的有能感を感じることは一種の自己評価であるが、自覚の程度は他者評価の場合の方が高いと考えられる。仮想的有能感そのものは、日常的にはほとんど自

覚されないように思われる。しかし、何かの折りに他者軽視をすることで潜在的に求めていた有能感やプライドを一時的に体験するのである。

我々は個人の他者軽視傾向を測定することで仮想的有能感を推測しようと考え、尺度を構成した（Assumed Competence Scale: 以降 ACS と略記）。この尺度が他の尺度と異なるのは、項目内容という点では他者軽視するか、しないかを問題にしているが、実際には背後に潜む仮想的有能感を測定したことにしようとしている点である。無意識的な仮想的有能感の強さは意識可能な他者軽視の強さに反映されるものという前提から成立している。しかし、そのような前提が正しいかどうかは、様々な角度からの妥当性の検討を要するであろう。

本研究では関連すると考えられる他の構成概念との関係を検討することで仮想的有能感の構成概念妥当性を検証しようとする。もし、仮想的有能感の測定が妥当であれば、その概念上の論理からは他の心理学的構成概念との間には一定の関係が予想されるはずで、本研究ではそれを確認しようとする。また、本研究では仮想的有能感と対比的に、一見類似しているが、概念構成上はまったく異なる「自尊感情」も取り上げ、他の心理学的構成概念との関係を見ていこうとする。前述したように ACS が表面的には他者評価をしているものであるのに対して、自尊感情は自己評価である。極端な言い方をすれば、直接的には他者をどれほど高く、あるいは低く評価するかが ACS で捉えられており、自分をどれほど高く、あるいは低く評価するかが自尊感情で捉えられるともいえる。また、自尊感情は仮想的有能感とは異なり、自信を獲得できるような成功経験をとおして比較的妥当に自己を評価したり、他者に評価されることでえられたものと推測される。自尊感情は「自分自身による『自分』への肯定的評価」(Baumeister, 1998), 「自己概念と結びついている自己の価値と能力の感覚」（遠藤、1992）と定義される。なお以前の研究で ACS と自尊感情の相関は.034 で無相関であった（速水・木野・高木、2003）。すなわち、自尊感情は仮想的有能感とは明らかに弁別されうる概念なのである。

さて、次に本研究で用いられた他の心理的構成概念の内容、さらにその構成概念と仮想的有能感および自尊感情との予想される関係について述べておこう。

①統制の位置（Locus of Control）

Rotter(1966)のいう統制の位置は内的統制－外的統制の程度を意味するが、内的統制は自分の内的な能力や努力が個人の成功や失敗、あるいは正負の社会的事象に随伴しているという信念を強くもつことを含意し、外的統制はそ

のような行動と結果（強化）の間に随伴性がなく、運や偶然で事が決まるという強い信念をもつことを含意する。自尊感情が強いことは成功・失敗経験に基づくのに対して仮想的有能感はそれらとは無関係に感じられるものであることから、自尊感情の高さは内的統制傾向と正の関係が予想されるのに対して仮想的有能感の高さは内的統制傾向と負あるいは無相関と予想される。なぜなら、仮想的有能感は自分の力量を反映した達成に関係なく、他者軽視により形成されるからである。

②自意識

自意識は公的自意識と私的自意識に分けられるが、前者は自己の外見や他者に対する言動など、他者が観察しうる自己の側面に注意を向ける程度であり、他方、後者は自分の内面や感情、気分など他者からは観察されない自分の側面に注意を向ける程度である。仮想的有能感の高い人は現実にはあまり有能感が満たされているわけではないので、たえず無意識的にしろ、他者軽視的な刺激を求めて自分の有能感を高めようとしていることを考えると自分の内面には相当関心が強くてしかるべきと考えられる。つまり、仮想的有能感の高い人は私的自意識が高いと予想される。一方、自尊感情の高い人は自分に一定の自信をもっており、他者から観察しうる部分、観察しえない部分に関係なく過剰な自意識はなく、公的自意識も私的自意識もあまり高くないと予想される。

③孤独感

多くの人と積極的に交わることのできる人たちは他者の人格も尊重しているように思われる。一方、他者軽視をする人は他者に共感できないということで孤独感を抱いているのではないかと予想される。そこで本研究では落合(1983)による孤独感の類型判別尺度との関係を明らかにしようとする。ACSが妥当ならば、孤独感の人間同士共感しあえると感じ、考えているか否かという理解の次元とは負の関係が、孤独感の人間の個別性に気づいているか否かに関する個別性の次元とは正の関係が予想される。すなわち、他者軽視傾向が強く、ACSの高い人は、人間同士共感しあえないと感じ、人間の個別性を強く意識していると予想される。一方、自尊感情の高い人はそのような孤独感の次元と無関係と考えられる。

④共感性

前述したように、他者軽視に基づいて仮想的有能感を感じる背景として彼らの共感性が低いことが関係していると予想される。逆に言えば共感性が高

ければ、他者の立場が理解でき、おいそれと他者軽視をするようなこともないと考えられる。それ故、ACSで仮想的有能感が妥当に測定されているとすると共感性の高さとは負の関係が予想される。一方、自尊感情の高さはむしろ共感性を抱く余地を与えるように思われる。

⑤怒りの感情

他者を軽視して自分の有能さを感じることは他者との衝突が生じた時、悲しみよりは怒りを生じやすいと推測される。自分が他者よりも優位に立つことで怒りが生じやすくなるのである。怒りは地位の高い者から低い者に対して示されやすい感情である。他方、自尊感情の高い人は自分に自信をもっているので些細な他者との衝突などで怒ったりしないものと考えられる。従ってACSと怒りの感情の生じ易さは正の関係が、自尊感情とそれとは無相関あるいは負の関係が予想される。

⑥感情経験（過去3ヶ月）

日常の感情経験に関して、快感情、不感情という大きな分類からすれば自尊感情の高い人は快感情を感じやすいのに対して、ACSの高い人は真の有能感が十分に満たされないために、また、他者軽視することで妬みや恨み等が生じるため不快感が高まると予想される。

⑦生活満足度

これは上記の感情経験とほぼパラレルに考えられよう。すなわち、ACSで仮想的有能感が妥当に測定されていれば生活満足度は概して低く、自尊感情が高い方が生活満足度は高いであろう。

方 法

1．調査対象

ACSと自尊感情は短期大学生124名、四年制大学生258名、大学院生11名の計393名（男性128名、女性264名、不明1名）が対象となった。他の尺度については全員にすべての尺度を実施することが時間的に困難であったため、これらの被調査者の一部が対象となった。自意識と孤独感は75名、怒りの感情と統制の位置に関しては120名、共感性、生活感情、生活満足度に関しては125名が対象となった。

2．調査内容

1）　仮想的有能感:「自己の直接的なポジティブ経験に関係なく、他者の能力を批判的に評価、軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚」という定義に従い、Table1-1 のような 11 項目からなる尺度(ACS-Version1)を構成した。ただし、ここでいう有能感は細かな領域別のものではなく、自己価値というような幅広いものである。また評価対象となる他者として世間一般の他者を想定した項目を 5 項目、より身近な経験の中での他者を想定した項目を 6 項目用意した。回答は「1:全く思わない」から「7:頻繁に思う」までの 7 段階の評定尺度上で求められた。この尺度の因子分析結果や信頼性係数は別の論文（速水・木野・高木　投稿中）で示しているので省略するが一次元尺度であり、再検査信頼性も高い。

Table1-1　ACS-Version1 の項目

項　目
1.他人に対して、なぜこんな簡単なことがわからないのだろうと感じる
2.たいした能力を持たないのに偉い地位にいる人が多いと思う
3.会議や話し合いで、無意味な発言をする人が多いと思う
4.他人の仕事を見ていると、要領が悪いと感じる
5.今の日本を動かしている人の多くは、たいした人間ではないと思う
6.他人を見ていて「こういう人が社会をダメにしている」と感じる
7.世の中には、常識の無い人間が多すぎると思う
8.大切な仕事を任せられるような有能な人は、私の周りに少ないと思う
9.企業では、実力よりも勤務年数や運で出世する人が多いと思う
10.周囲の人のセンスの悪さや感性の鈍さが気になる
11.私の意見が通らなかった時、相手の理解力が足りないと感じる

2）　自尊感情：Rosenberg(1965)による自尊感情尺度の日本語版（山本・松井・山成、1982）を用いた。全 10 項目からなり、回答は「1:あてはまらない」から「5:あてはまる」までの 5 段階尺度上で求められた。

3）　妥当性基準として用いられた他の心理学的構成概念

①　統制の位置

鎌原・樋口・清水(1982)による Locus of Control 尺度を用いた。自分の行動と強化が随伴しないと認知し、強化が運や他者などの外的要因に

コントロールされているという信念（外的統制）と、自分の行動と強化が随伴すると認知し、自分の能力や技能により強化がコントロールされているという信念（内的統制）の相対的強度測定する尺度であり、全部で18項目からなる。回答は「1:そう思わない」から「4:そう思う」までの4段階尺度上で求めた。内的統制傾向が高いほど得点が高くなるようにスコアリングした。

② 自意識

菅原(1984)による自意識尺度を用いた。公的自意識（他者が観察しうる自己の側面に注意を向ける程度）は11項目、私的自意識（他者からは観察されない自分の側面に注意を向ける程度）は10項目の下位尺度からなる。回答は「1:全くあてはまらない」から「5:とてもよくあてはまる」までの5段階尺度上で求めた。

③ 孤独感

落合(1983)による孤独感の類型判別尺度を用いた。人間同士共感しあえると感じ、考えているか否かという理解の次元については9項目、個別性に気づいているか否かに関する個別性の次元については7項目からなる尺度である。回答の方式は「1:いいえ」から「5:はい」までの5段階評定尺度であった。

④ 共感性

木野・鈴木・速水(2000)の多次元共感性尺度の改訂版が用いられた。この尺度は本来、共感性の認知的側面と情動的側面に関する下位概念から構成されているが、このうち、情動的側面に関する、他者指向的情緒反応、自己指向的情緒反応、被影響性について測定した。「他者指向的情緒反応」とは他者の心的状態に対して他者に焦点づけられた情緒反応を示す傾向を、「自己指向的情緒反応」とは他者の心理状態に対して自分に焦点づけられた情緒反応を示す傾向を、「被影響性」とは他者の感情や態度、あるいは流行からの影響の受け易さを意味する。回答は「1:全くあてはまらない」から「5:とてもよくあてはまる」までの5段階尺度で求められた。

⑤ 怒りの感情

Spielberger(1988)による STAXI の日本語版（鈴木・春木、1994）を用いた。この尺度は怒りに関する5側面、状態怒り、特性怒り、怒りの

表出、怒りの抑制、怒りの制御を測定するものである。ここでは状態怒り以外の下位尺度を用いた。「特性怒り(9 項目)」はパーソナリティ特性としての怒り易さの個人差を、「怒りの表出（7 項目)」は怒りを外部に向ける傾向を意味している。また「怒りの抑制」は怒りを内にためる（心の中に抱く）傾向をみるものであったが、ネーミングと意味が必ずしも一致しないように思われ、これを我々は「怒りの沈殿（6 項目)」と新たに名づけた。さらに「怒りの制御（7 項目)」は怒りが外に出るのを抑え、認知的に制御する傾向を測定するものであった。回答は「特性怒り」に関しては「1:全くあてはまらない」から「5:とてもよくあてはまる」まで、それ以外は「1.まったくしない」から「5.とてもよくする」までの 5 段階評定尺度上でなされた。

⑥ 感情経験

主観的ウェルビーイングの情緒的側面を測定するために、鈴木(2002)において利用された尺度に若干の改変が加えられたものを用いた。快感情、不快感情それぞれ 6 項目ずつあげ、学業、友人関係、家族関係の各場面において過去 3 カ月の間にそれぞれの感情を経験した程度を「1:全く感じなかった」から「5:とても感じた」まで 5 段階評定尺度で尋ねた。

⑦ 生活満足度

主観的ウェルビーイングの認知的側面を測定するために、鈴木(2002)において利用された尺度に若干の改変が加えられたものを用いた。全般的生活満足度に加えて、被験者の生活の中心となる学校生活の学校生活満足度と家庭生活満足度、および対人関係の中心である友人関係における友人満足度をみるもので、それぞれ 6 項目ずつで構成されていた。回答は「1:全くあてはまらない」から「5:とてもよくあてはまる」までの 5 段階尺度で求められた。

結 果

Table1-2 は本研究で実施された様々な心理的構成概念の平均および標準偏差、および ACS、自尊感情との相関係数を示したものである。

Table1-2 仮想的有能感および自尊感情と他の心理学的構成概念との関係

	仮想的有能感	自尊感情	N	M	SD	α
①統制の位置	−0.154	0.361 ***	120	50.17	6.59	0.72
②自意識						
公的自意識	0.025	−0.206	74	40.93	8.23	0.89
私的自意識	0.238 *	−0.127	75	36.76	6.23	0.84
③孤独感						
理解	−0.224	0.201	75	36.84	6.70	0.88
個別性	0.272 *	−0.054	75	22.63	5.19	0.65
④共感性						
他者指向的情緒反応	−0.135	0.169	125	15.26	2.83	0.72
自己指向的情緒反応	−0.194 *	0.073	125	12.86	2.97	0.63
被影響性	−0.244 **	−0.147	125	12.74	2.94	0.69
⑤怒りの感情(STAXI)						
特性怒り	0.273 *	−0.103	119	25.87	5.25	0.81
怒りの表出	0.397 ***	−0.135	120	17.13	3.78	0.66
怒りの沈殿	0.207	−0.114	119	17.38	3.24	0.71
怒りの制御	−0.227 *	−0.091	119	20.31	4.26	0.84
⑥感情経験(過去3ヶ月)						
学業(快感情)	−0.141	0.266 **	125	15.10	4.89	0.86
友人関係(快感情)	−0.092	0.289 **	125	23.62	4.85	0.90
家族関係(快感情)	−0.189 *	0.129	125	20.82	5.35	0.88
学業(不快感情)	0.222 *	−0.210 *	125	19.51	4.73	0.81
友人関係(不快感情)	0.237 **	−0.321 ***	125	16.06	5.09	0.85
家族関係(不快感情)	0.121	−0.223 *	125	14.16	4.83	0.84
⑦生活満足度						
学校生活満足度	−0.195 *	0.460 ***	125	20.07	4.81	0.82
友人関係満足感	−0.199 *	0.337 ***	125	22.86	4.16	0.81
家族関係満足感	−0.131	0.297 ***	125	23.34	4.89	0.84
全般的生活満足感	−0.132	0.459 ***	125	20.77	5.08	0.86

まず、統制の位置に関してはACSとは予想通り負の関係がみられたものの、有意ではなかった。一方、自尊感情に関しては高いほど内的統制傾向が高いといえた。

自意識との関係ではACSは公的自意識とは無相関であるが、私的自意識とは.238で有意な正の相関がみられた。予想通り、仮想的有能感が高いほど自分の内面に注意を向ける傾向があるといえる。一方、自尊感情とは公的自意識、私的自意識とも負の相関がみられたものの有意ではなかった。

孤独感に関しては、ACSが妥当なら理解の次元とは負の、個別性の次元とは正の関係が予想され、結果的に正負の方向は支持されたものの、後者の相関だけが有意であった。また、自尊感情はいずれの次元とも有意な関係は認められなかった。

続いて共感性に関しては予想通り仮想的有能感が高いほど3つの下位尺度とも低いという関係がみられた。つまりACSで高い得点を示した人は共感性が低かった。ただし、他者指向的情緒反応との相関は有意ではなかった。一方、自尊感情と共感性は一貫した関係がみられなかった。

次に怒りの感情に関してはすべての下位尺度でACSとの間に有意な相関がみられた。すなわち仮想的有能感が高いほど特性怒り、怒りの表出、怒りの沈殿の得点が高く、怒りの制御が弱いことになる。これに対して自尊感情と怒りの感情の間には一定方向の関係は認められなかった。

感情経験に関してACSは快感情とは負、不快感情とは正の関係があれば、測定が妥当であろうと予想した。快感情は家族関係で不快感情は学業と友人関係で予想された有意な関係がみられた。一方逆の関係、快感情とは正、不快感情とは負の関係が自尊感情との間により明瞭に認められた。

生活満足感に関しては4つの領域すべてでACSとの間に負の関係を予想した。確かに負の関係はみられたが有意な負の相関は、学校生活満足感と友人関係満足感の2つの領域のみであった。自尊感情は満足感とはすべての領域で高い正の相関関係を示した。

考察

先に述べたように、ここで仮想的有能感と呼んでいるものは、直接的には他者を軽視するという態度や行動からもたらされるものである。そして、他者軽視をする傾向というのは、自分自身のあり方について大いに気がかりであるが、自分で自分を十分制御していけるとは考えられないという弱さから生じていると考えた。その意味で私的自意識とは正の関係を、また、内的統制とは負の関係を予想した。前者は支持されたが、後者については方向としては支持されたものの、有意な関係はみられなかった。

また、他者軽視をする背景には人間関係の調整のまずさのような傾向が存

在すると仮定した。すなわち、共感性に乏しく、孤独を感じやすい人が、他者の価値を十分認識できないために、他者を低く評価することで自分をもちあげようとするのではないかと推測した。結果としてはACSの高い人は共感性に欠けるという関係性が示された。また、孤独感に関してはACSの高い人は人間が相互に理解しがたいものと考え、人間の個別性への意識が強いことが示され、ほぼ予想が支持されたといえる。

さらに真の有能感ではなく、他者軽視に基づく仮想的有能感を抱かざるを得ないのは彼らが日常生活全般に不満が多く、不快な感情を抱くことが多いからである、あるいは仮想的有能感を抱くことで必然的に不快な感情を抱くことが多くなると考えた。特に不快な感情の代表的なものである怒りの感情に関しては、自分は有能であり、それに比べて他者は無能であるという立場から、地位の高い人が低い人に怒り易いように、怒りを生起させやすいと考えた。現在の若者たちがよくキレルというのは、真の意味で自信があるわけではない。事実、それは自尊感情の国際比較研究、あるいは年齢別の研究からも日本の若者は概して自尊感情が低いことが知られている(河内、2003)。だとすれば別のメカニズムが働いているわけで、それがここでいう仮想的有能感にあたるものだと考えられよう。研究結果は上述のことをほぼ支持していた。

この結果をまとめたものが Figure1-1 であり、以上の結果からみる限りACSはわれわれが想定している概念を測定している、すなわち構成概念妥当性が一定程度あるといえる。自尊感情とはまったく異なる概念であることも傍証された。しかし、いうまでもなく、妥当性がこの研究で完全に検討されたというわけではなく、今後とも他の心理学的構成概念との関係をみる研究を積み重ねる中で「他者軽視に基づく仮想的有能感」の概念をより明瞭にしていくことが肝要である。

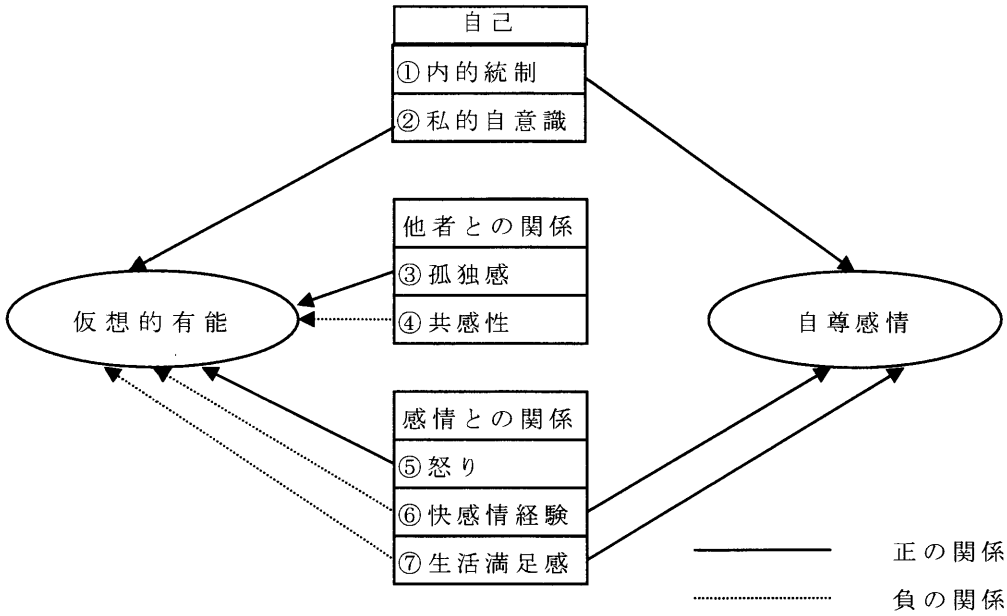

Figure 1-1 仮想的有能感および自尊感情と他の心理学的構成概念との関係

ところで冒頭にも述べたように妥当性の検討は様々な角度からなされる必要がある。現在、我々は次のような妥当性検討を実行したり、計画している。その第1は本研究と同様の他の心理学的構成概念との関係であり、16PF との関係も検討している（山田・速水、2004)、第2は仮想的有能感に関する他者評価との関係みることで妥当性を確認しようとするものである（高木・速水・木野、2004)。さらに第3は本来の仮想的有能感が無意識的なものだとすると、それを何らかの外的刺激によって喚起させることで有能感を高め、パフォーマンスに反映させることで妥当性を検証しようとするものである。

最後に、「仮想的有能感」という構成概念の問題点についてふれておこう。本研究の結果からは、ある程度の妥当性が示されたものの、実は冒頭にあげたこの概念の問題点、すなわち他者軽視がすなわち仮想的有能感といえるのかという疑惑が払拭されたわけではない。仮想的有能感は過去の成功・失敗経験に関係なく、形成されるものというようにこれまで説明してきたが、自尊感情との特定方向の関係がないことを考慮すると、仮想的有能感の高い人の中には自尊感情の低い人だけでなく、自尊感情の高い人も存在することになる。そして、2つの変数の組み合わせを単純に考えれば、4つの型が存在することになる。これを示したものが Figure1-2 である。この図で B にあたる人は、現実には自信がないために防衛的に他者を低く評価することで有能感をえようと推測される。他方、A の人たちは自分に自信があるからこそ他者を低く評価して、当然のこととして有能感を抱くと考えられる。だとすれ

ば、両者の「仮想的有能感」の意味合いは異なることになる。「仮想的」という言葉を冠するのは前者に属する人たちがよりふさわしいのかもしれない。さらにACSの得点が低いCとDにあたる人たちもそれぞれ異なる特徴を有していると考えられる。このように4つの型に分けて特徴を検討していくことが今後の課題であり、それによって概念の意味も明確化するものと思われる。

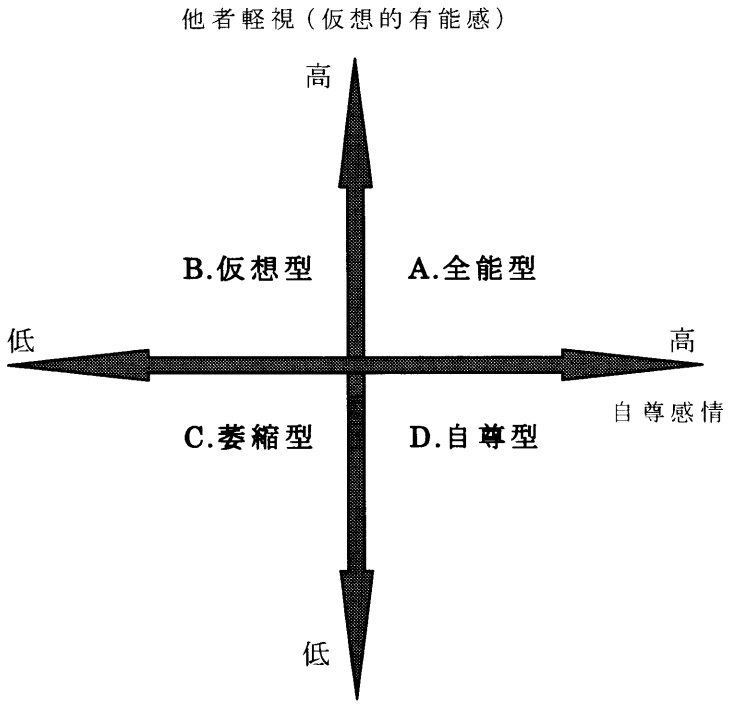

Figure1-2 他者軽視傾向（仮想的有能感）と自尊感情の高低による有能感の分類

引用文献

Baumeister, R. F. 1998 The self. In D.T. Gilbert, S.T.Fiske,& G. Lindley (Eds.) *The Handbook of Social Psychology. 4th edition.* Vol.1. New York: McGraw-Hill. Pp. 680-740.

遠藤辰雄 1992 セルフ・エスティーム研究の視座 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千壽（編） セルフ・エスティームの心理学 ナカニシヤ Pp.8-25

速水敏彦・木野和代・高木邦子 2003 自主シンポジウム 「仮想的有能感」

をめぐって　日本教育心理学会第45回総会発表論文集　S46.
鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治　1982　Locus of Control尺度の作成と、信頼性、妥当性の検討　教育心理学研究, **30**, 302-307.
河内和子　2003　自信力はどう育つか　－思春期の子ども世界4都市調査からの提言　　朝日新聞社
香山リカ　2004　＜私＞の愛国主義　ちくま新書
木野和代・鈴木有美・速水敏彦　2000　友人の不快感情調整に関わる要因の検討　－女子青年を対象に－　名古屋大学大学院教育発達科学研究科（心理発達科学）,**47**, 59-68.
落合良行　1983　孤独感の類型判別尺度(LSO)の作成　教育心理学研究, **31**, 332-336.
Rotter, J. B. 1966　Generalized expectancy for internal vs. external control of reinforcement. *Psychological Monographs*, **80**, 1-28.
Rosenberg, M. 1965　*Society and the adolescent self-image.* Princeton: Princeton University Press.
Spielberger, C. D.　1988　*Manual for the State-Trait Anger Expression Inventory(STAXI).*　Odessa, FL: Psychological Assessment Resources.
菅原健介　1984　自意識尺度（self-consciousness scale）日本語版作成の試み　心理学研究, **55**, 184-188.
鈴木平・春木豊　1994　怒りと循環器系疾患の関連性の検討　健康心理学研究, **7**, 1-13.
鈴木有美　2002　自尊感情と主観的ウェルビーイングからみた大学生の精神的健康　名古屋大学教育発達科学研究科紀要（心理発達科学研究科）, **49**,　145-155.
高木邦子・速水敏彦・木野和代　2004　仮想的有能感尺度の妥当性検討　日本教育心理学会第　回総会発表論文集
山本眞理子・松井豊・山成由紀子　1982　認知された自己の諸側面の構造　教育心理学研究, **30**, 64-68.
山田奈保子・速水敏彦　2004 仮想的有能感と性格検査との関連―16PM との関連から―　日本パーソナリティ心理学会第13回大会論文集

研究２　仮想的有能感および自尊感情と成功・失敗経験ならびに一般的怒りとの関係

問　題

我が国の現代青年の特徴として「怒りやすさ」があげられる。そして，彼らの間では「キレる」とか「むかつく」という言葉が頻繁に使われている。速水・丹羽 (2002) による小・中学校の教師を対象にした面接調査では，現在の児童・生徒たちは「悲しみ」「喜び」といった情動を昔の児童・生徒に比べて持ちにくく表出も少なくなった一方で，「怒り」の情動については抱きやすく，表出もしやすくなったと指摘されている。

このような情動の持ち方や表出の変化は，自他の能力のとらえ方の変化に由来するところが大きいと思われる。つまり，客観的には同一の事象に遭遇しても，その事象の解釈は自己および他者の能力に対する評価に影響を受け，その結果生起する情動が異なるのではないかと考えられる。こうした現代青年の情動の特徴を自他の能力のとらえ方との関連から説明する試みの一つとして，本研究では特に怒りの情動をとりあげて検討する。怒りは個人内的にも対人的にもネガティブ情動であり，自分や他者への攻撃行動につながりやすい。実際，青少年の様々な攻撃行動が大きな社会的問題となっている現状を考えると，怒りの情動生起の背景要因を探ることは,それを静める手だてを考えるうえでも意義あることである。

では，現代青年が他者に対して怒りを頻繁に感じるのは，どのように自他をとらえているからなのであろうか。Barr-Zisowitz (1999) は怒りと悲しみの違いについて，怒りは他者に責任のある場合にみられるが，悲しみは誰にも落ち度のない場合にみられる，また，怒る人は失った目標を置き換えることができると感じるが，悲しむ人は失ったものを受容すると述べている。さらに，怒りは目上の者が目下の者に対しての方が逆の場合よりも示されやすいことも指摘されている (木野, 2000)。これらの事実を総合すると，怒りは当人が相手に対して優越感や有能感を抱いている場合に生じやすいように思われる。優越感や有能感を感じれば自分でなく相手に落ち度があると考えやすく，また，失った目標を受容するのでなく取り返せると見なしやすい。そのために他者への怒りが生じるといえる。

このように考えるならば，怒りの多い現代青年は有能感が高いのであろうか。しかし，その答えは否定的なものが多く，逆に現代青年における有能さの感覚の低さを指摘する研究も少なくない。古澤 (2000) は日本人，帰国子女日本人，日系米国人，白系米国人の中学生の有能感を比較して，日本人や帰国子女日本人のあらゆる領域 (学業・運動・道徳性・友人関係・親子関係) の有能感が低いこと

を指摘している。また，岡野 (2002) によれば，地方の公立大学や東京六大学の一つという，世間一般に自信を持ってよいとみなされるレベルの大学の学生でさえ90%近くが「自分に自信がない」と答えているという。これらは彼らがあまり有能さを感じていないという事実を示唆するものである。

他方，現代青年は自己愛的な傾向が強くなったとする指摘もあり (福島, 1992; 町沢, 1998)，彼らは自分自身への関心の集中と自信や優越感などの自分自身に対する肯定的感覚を抱いていると推測できる。また，外山・桜井 (2001) は，実際に存在するもの・ことを自分に都合よく解釈したり想像したりする精神的イメージであるポジティブ・イリュージョンを日本人も抱くことを示している。さらに，最近では自分が悪くても教師にあやまろうとしない生徒が多くなったという指摘 (速水・丹羽, 2002) などは現代青年のむしろ傲慢と思えるほど自信を持った像を想定させる。

現代青年の有能さの感覚に関するこれらの一見矛盾する知見は，自信や有能さの感覚の根拠の一つとみなされる経験との関連性を考慮することにより解釈可能であろう。本来の有能さの感覚や自信は，本人自身の経験やそれに基づく自己評価および他者評価により形成されるものであると考えられる。しかし，「自己愛的傾向」や「ポジティブ・イリュージョン」という表現に代表されるように，現実の能力を省みず自己を実像以上に高く評価することによって形成され，自己の経験とは直接関連のない有能さの感覚も存在すると思われる。

筆者らは，なぜ現代の若者が怒りやすいのかという問題を解く鍵の一つとして，個人的経験に基づく有能感よりもむしろ歪んだ有能感，自己を甘く見るために生じる有能感との関連を検討することが有効であると考え，「自己愛的有能感」という概念に着目してきた (Hayamizu, 2002; 高木・速水, 2001)。自己愛的有能感は小塩 (1997, 1998) が自己愛を構成する一つの要素としてあげた「優越感・有能感」に相当し，自己の重要性に関する誇大な感覚や自分を過大評価して時に自慢やうぬぼれを示すことを意味している。しかし，実際に質問紙法により自己愛的有能感と怒りの強さの関係を検討してみると，必ずしも密接な関連がみられなかった (高木・速水, 2001)。

ここで扱われた自己愛的有能感は，「私が言えば，どんなことでもみんな信用してくれる」「私に接する人はみんな私という人間を自然に気に入ってくれる」といった項目で測定されており，自己を過大評価する傾向を見ようとするものではあるが，自分の経験と全く関係がないものではないと考えられる。怒りの生起しやすさには自分の実際の能力や経験に関わらない有能さの感覚がより大きな影響力を持つように思われる。

そこで本研究では他者を軽視，あるいは過小評価することで生じる自己の有能さの感覚を扱う。自己の有能さの感覚は比較の対象となる他者の有能さのとらえ

方にも左右されるものである。すなわち，他者の能力を現実以上に高いと見なす場合には相対的効果として自己の能力を低くみなすことになる (上方比較)。他方，他者の能力を低く見積もれば相対的に自己の能力を高くみなすことになる (下方比較)。現代青年が他者への敬意を払わなくなり，利己的な考え方を持つことはよく指摘されるところであり (e.g., 中里, 1999)，他者軽視をすることで有能さの感覚を保持する青年たちも少なくないように思われる。

以上より，現代青年が抱く自信や有能さの感覚として扱われるものの中には質的に異なるものが混在している可能性が指摘できよう。この有能さの感覚に関する概念をその形成過程に注目して整理すると次の3つに分けられるであろう。ただし，ここでいう有能感とは一時的なものでなく傾性的なものである。第一は自信を獲得できるような成功経験をとおして正当に自己を評価したり，他者に評価されることで得られたものである。これは「自分自身による『自分』への肯定的評価」(Baumeister, 1998)，「自己概念と結びついている自己の価値と能力の感覚」(遠藤, 1992) などと定義される，一般に「自尊感情」といわれる有能さの感覚であろう。高比良 (1998) は自尊感情とライフイベントとの関係を検討し，ポジティブイベントとは正の，ネガティブイベントとは負の関係がみられたと報告している。第二は現実にはそれほど多くの成功経験をしていないのに自己評価が甘いことから自分を実像より大きく認知する場合に得られるもので，Hayamizu (2002) および高木・速水 (2001) で取り上げられた自己愛的有能感に相当する。そして第三は自分の実績とは関係なく，他者を低く評価することで得られる有能さの感覚である。他者を低く評価することにより有能さの感覚を維持すること自体望ましいことではないため，これは無意識的に形成・保持されるものと思われる。だが，少なくとも現代青年の有能さの感覚のなかには，特定の身近な他者というよりは不特定な世の中の人々を軽視したり批判的に評価することにより，心理的安寧を得るという防衛的な意味を持つものが存在しよう。

ところで，第三の有能さの感覚のような心理的構成概念に着目した研究はこれまでになされていないようである。本研究ではこれを他者軽視・他者批判に基づく「仮想的有能感」と呼び，「自己の直接的なポジティブ経験に基づくことなく他者を批判的に評価したり，軽視する認知的傾向に呼応して感じられる比較的持続的な有能さの感覚」と定義する。

以上のことから本研究では，仮想的有能感という新しい構成概念を提起し，現代青年の有能感のあり方と怒りの持ち方について探索的に検討を試みる。具体的には，研究1において仮想的有能感の個人差を測定する尺度を構成し，研究2では仮想的有能感と怒りとの関連を確認する。この際，研究1・研究2をとおして，現実の能力を反映した有能さの感覚であると考えられる「自尊感情」の概念と比較することにより，構成概念妥当性の検討も行う。

研 究 1

本研究では第一に，他者軽視に基づく仮想的有能感を測定する尺度を構成し，自己の経験に対する正当な評価に基づいて形成されると考えられる自尊感情との関連を検討する。Harter (1982) によれば，有能感には領域別の有能感 (学習面，社会面，運動面) と一般的な有能感 (一般的自己価値) が想定されている。この一般的自己価値と自尊感情には有意な正の相関があるとの報告がある (桜井，1983)。したがって，自尊感情と一般的な有能感は，言葉は異なるが概念的にはかなり近い位置にあるものと考えられる。しかし，仮想的有能感は他者軽視に基づくものであり，自尊感情とは異なる性質を持つと考えられる。さらに，探索的ではあるが，これらとは形成過程を異にすると考えられるもう一つの自己の有能さの感覚，つまり自己愛的有能感との関連についても併せて検討する。

自己愛的有能感と自尊感情は自己評価である点で共通し，自己愛的有能感と仮想的有能感は自己の過大・他者の過小評価のように正当な評価に基づかず，実際の能力レベル以上の自己評価につながる点では共通していると考えられ (Table2-1参照)，それぞれある程度の正の関連が予測される。ことに，前者の関係については自己愛傾向の下位尺度である優越感・有能感 (本研究での自己愛的有能感に相当する) と自尊感情は .30以上の相関がみられたとの知見もある (小塩，2001)。しかし，自尊感情と仮想的有能感は，その評価対象 (前者が自己，後者が他者) と評価の正当性 (前者は正当，後者は過小視) のいずれにおいても異なる有能さの感覚であるため，両者の関係は先の2つの関係に比べて弱いものと考えられる。

Table2-1 自尊感情，自己愛的有能感および仮想的有能感の概念的区別

	自尊感情	自己愛的有能感	仮想的有能感
評価対象	自己	自己	他者
評価の正当性	正当	過大視	過小視

第二に，仮想的有能感および自尊感情と日常的なポジティブおよびネガティブ経験との関連を検討する。前述の高比良 (1998) が指摘するように，自尊感情はポジティブ・ネガティブ経験と密接に関連することが知られているが，他者軽視に基づく仮想的有能感においては同様の関係はみられないと考えられる。なぜなら，仮想的有能感は他者を低く見る傾向から間接的に感じられるものであり，自己の直接的な外界への働きかけの成功・失敗経験に影響を受けるものではないと推測されるからである。

方法

調査対象　短期大学生124名，四年制大学生258名および大学院生11名の計393名（男性128名，女性264名，不明1名）を対象に質問紙調査を実施した。

調査内容

1. 仮想的有能感:「他者を批判的に評価したり軽視するという認知的傾向に呼応して感じられる」という仮想的有能感の定義にしたがい，Table2-2に示す11項目からなる尺度を作成した。評価対象となる他者として，世間一般の他者を想定した項目（例えば「世の中には常識のない人間が多すぎると思う」)を5項目，より身近な経験の中での他者を想定した項目（例えば「他人の仕事を見ていると要領が悪いと感じる」）を6項目準備した。回答は「1: 全く思わない」から「7: 頻繁に思う」までの７段階尺度で求められた。

2. 自己愛的有能感: 小塩（1997, 1998）を参考に，自己を実像より大きく認知することに起因するという自己愛的有能感を測定するものとしてよりふさわしいと考えられる3項目を新たに作成した。すなわち，「私はもっと認められてよい人間だと思う」「私は他人から悪口を言われるような人間ではないと思う」「私は，どんな人にも有益なアドバイスができると思う」である。回答は「1: 全く思わない」から「7: 頻繁に思う」までの７段階尺度で求められた。

3. 自尊感情: Rosenberg (1965) による自尊感情尺度の日本語版（山本・松井・山成, 1982）を用いた。全10項目からなり，回答は「1: あてはまらない」から「5: あてはまる」までの5段階尺度で求められた。

4. ポジティブ・ネガティブ経験の量: 様々なポジティブあるいはネガティブ事象の主観的経験量をたずねた。これらは大学生の大部分が経験している可能性が高く，その多くは自尊感情を左右すると想定されるものである。具体的にはポジティブ経験10項目，ネガティブ経験17項目の計27項目からなり，ポジティブ・ネガティブ経験ともに，直接的な達成経験（ポジティブ経験: 項目3, 6, 12, 19, 27; ネガティブ経験: 項目4, 5, 9, 22, 23）および直接的な対人経験（ポジティブ経験: 項目14, 16, 20, 24, 25; ネガティブ経験:項目1, 8, 10, 11, 13, 18, 21, 26）を含んでいる。さらにネガティブ経験については，間接的な経験（項目2, 7, 15, 17）も用意された（Table2-3参照)。間接的なネガティブ経験は緩衝項目として含められており，自己の直接の経験ではないため，自尊感情とは関連がみられないことが予想される。回答に際しては，同じ年頃の人と比較した自分の各経験の量について「1: 少ない」から「5: 多い」までの5段階尺度で判断するよう教示した。

結果

1. 仮想的有能感尺度の検討

仮想的有能感尺度として用意した各項目に対する評定平均は2.99から4.65の範囲に，標準偏差は1.14から1.52の間にあり極端な回答の偏りはみられなかった。そこでこれらの全11項目について主成分分析を試みた (Table2-2)。固有値は第一成分から，3.76，1.36，0.91となり，第一成分で全分散の34.19%が説明可能であったため一次元尺度とみなして差し支えないと判断した。「私の意見が通らなかった時，相手の理解力が足りないと思う」という項目については，負荷量が .396とやや低かったが内容的にも妥当であり，この項目を削除しても全体の信頼性係数であるα係数の上昇がみられなかったため，11項目の合成得点を仮想的有能感の尺度得点とした。全体のα係数は .80と十分な値を示した。尺度得点の平均値は43.15，標準偏差は8.58であった。なお，ここで構成された仮想的有能感を測定する尺度をAssumed Competence Scale (以下ACS) と呼ぶ。

Table2-2 仮想的有能感尺度の項目内容および主成分分析結果

項目	負荷量
他人に対して、なぜこんな簡単なことがわからないのだろうと感じる	.721
たいした能力を持たないのに偉い地位にいる人が多いと思う	.705
会議や話し合いで、無意味な発言をする人が多いと思う	.641
他人の仕事を見ていると、要領が悪いと感じる	.620
今の日本を動かしている人の多くは、たいした人間ではないと思う	.601
他人を見ていて「こういう人が社会をダメにしている」と感じる	.589
世の中には、常識の無い人間が多すぎると思う	.577
大切な仕事を任せられるような有能な人は、私の周りに少ないと思う	.574
企業では、実力よりも勤務年数や運で出世する人が多いと思う	.473
周囲の人のセンスの悪さや感性の鈍さが気になる	.446
私の意見が通らなかった時、相手の理解力が足りないと感じる	.396
固有値	3.76
寄与率	34.19

2. 仮想的有能感，自己愛的有能感，自尊感情の関係

自己愛的有能感尺度の信頼性を検討するため，α係数を算出したところ，.56とやや低かったが，これは項目数が3項目と少なかったためであると判断した。そこでこれら3項目の合成得点を自己愛的有能感の尺度得点とみなした (平均は9.93,

標準偏差は2.52)。また，自尊感情尺度得点については，平均は29.78，標準偏差は6.41であり，α係数は .81であった。

これらの尺度得点を用いて3変数間の相関係数を求めた。まず，ACSと従来からの自尊感情尺度の相関係数は .03と無相関であることが示された。さらにACSと自己愛的有能感尺度の相関は .31，自己愛的有能感尺度と自尊感情尺度の相関は .34であり，いずれも0.1%水準で有意であった。したがって，予想したように，仮想的有能感と自尊感情は独立しているが，その間に自己愛的有能感が位置づけられることが示唆された。

3. ポジティブ・ネガティブ経験の量と仮想的有能感および自尊感情との関連

仮想的有能感および自尊感情とポジティブ・ネガティブ経験の量との関連を検討するため，相関係数を算出した (Table2-3)。まず，ポジティブ経験との関連については，自尊感情尺度は予想どおり10項目中9項目で有意な正の相関を示した。他方，ACSとは6項目で有意な正の相関が示されたが，いずれも自尊感情尺度との相関係数よりも低い値であった。ネガティブ経験と自尊感情尺度およびACSの相関については，両尺度でその関連の仕方に顕著な相違がみられた。つまり，自尊感情尺度はネガティブ経験全17項目のうち10項目で負の有意な相関がみられた。他方，ACSとの関係では負の有意な相関はみられず，逆に9項目で正の有意な相関がみられた。

なお，自己愛的有能感と経験量の関係については，自己愛的有能感の尺度の信頼性がやや低かったため言及を控えたが，自尊感情との相関と類似した結果がえられたことを報告しておきたい。

Table2-3 ポジティブ・ネガティブ経験の量と自尊感情および仮想的有能感との関係

領域分類	No.	項目	自尊感情 N=384	仮想的有能感 N=386
P 直接 達成	(3)	ゲームに勝ったこと	.13*	.12*
P 直接 達成	(6)	スポーツで活躍したこと	.17***	.00
P 直接 達成	(12)	ずっと欲しかったものを手に入れられたこと	.22***	.11*
P 直接 達成	(19)	テストの得点がよかったこと	.37***	.23***
P 直接 達成	(27)	表彰されたこと	.28***	.12*
P 直接 対人	(14)	家族と外食に出かけたこと	.10	.09
P 直接 対人	(16)	誰かの役にたったこと	.28***	.19***
P 直接 対人	(20)	親にほめられたこと	.28***	.01
P 直接 対人	(24)	かっこいい，もしくは，かわいいと言われたこと	.26***	.15**
P 直接 対人	(25)	多くの友人から好かれたこと	.28***	-.03
N 直接 達成	(4)	人前で失敗したこと	-.33***	-.06
N 直接 達成	(5)	大切にしていたものをなくしたこと	-.15**	.11*
N 直接 達成	(9)	スポーツが他の人のようにうまくできなかったこと	-.24***	-.02
N 直接 達成	(22)	欲しいものが手に入らなかったこと	-.14**	.03
N 直接 達成	(23)	勉強しても思うような成績があげられなかったこと	-.29***	-.04
N 直接 対人	(1)	身近な人が大きな病気にかかったこと	-.01	.13**
N 直接 対人	(8)	周りの期待に応えられなかったこと	-.36***	-.01
N 直接 対人	(10)	自分の生まれつきの体や顔のことで悪口を言われたこと	-.19***	.10
N 直接 対人	(11)	友だちに無視されたこと	-.19***	.20***
N 直接 対人	(13)	親しかった人との別れを経験したこと	-.03	.14**
N 直接 対人	(18)	家族や親戚の葬式に参列したこと	.08	.10*
N 直接 対人	(21)	人にしかられたり，注意されたこと	-.14**	.11*
N 直接 対人	(26)	友だちを傷つけてしまったこと	-.13*	.12*
N 間接	(2)	かわいそうな子どもたちについて見聞きしたこと	.06	.11*
N 間接	(7)	悲しい物語や小説を読んだこと	.07	.10
N 間接	(15)	悲しい映画やテレビドラマをみたこと	.03	-.03
N 間接	(17)	家族からつらい話を聞いたこと	.02	.12*

***$p<.001$，**$p<.01$，*$p<.05$

Pはポジティブ経験，Nはネガティブ経験

考察

11項目からなる仮想的有能感を測定する尺度 (ACS) を構成し，その一次元性を確認した。さらに，ACSは，自尊感情尺度とは無相関であり，自己愛的有能感尺度とは正の関連を持つことがわかった。したがって，従来の自尊感情とは質的に異なる有能さの感覚として，仮想的有能感の存在が示唆された。また，この仮想的有能感は，自尊感情に比べれば自己愛的有能感とは近い概念ではあるが，異なる側面を含んでいることがわかった。

また，日常的なポジティブ・ネガティブ経験との関連については，予想されたように自尊感情がポジティブ経験の量とは正の，ネガティブ経験の量とは負の関連が認められた。これは既述の高比良 (1998) による知見と一致する。それに対して，仮想的有能感はポジティブ経験の量とは弱い正の，ネガティブ経験の量とも正の関連がいくつか認められた。これらは決して高いものではないが，注目すべき結果である。仮想的有能感の高い人は，成功的な達成経験をいくらかしているものの，特に対人的なネガティブ経験を重ねていると推測された。対人関係でのネガティブ経験が仮想的有能感の形成過程において主要な役割を果たしているように思われる。つまり，人から無視されたり，人に叱られたり注意されるといった対人関係におけるネガティブ経験が世の中や周囲の人々への信頼を喪失させ，防衛的な意味での他者軽視にもとづく仮想的有能感の獲得につながっていることが推測される。ただし，今回測定した経験量は主観的なものであるため，自尊感情が高い人ほどネガティブ経験を実際よりも少なく認知し，仮想的有能感の高い人ほどネガティブ経験を実際よりも多いと認知する傾向が強いとも解釈可能である。本研究は縦断的な調査ではないため，このような経験と有能さの感覚の因果関係については明言できない。いずれにせよ，一般にネガティブ経験が多い人ほど自尊感情が低いという知見とは対照的である点は興味深い。

さらに，仮想的有能感は，直接的なネガティブ経験だけでなく，「かわいそうな子どもたちについて見聞きしたこと」「家族からつらい話を聞いたこと」といった本来緩衝項目として提示された間接的なネガティブ経験とも弱いが有意な正の関係がみられた。このような間接的ネガティブ経験を他者よりも多く受けていると感じることから,彼らが世の中をやや暗いものと見ていることが推測できる。他者軽視的な見方は世の中全体をネガティブなものとしてとらえているところから派生しているのかもしれない。

ただし，上述のような解釈は相関の有意性に着目したものである。関係の強さという視点からすれば仮想的有能感と経験の相関はいずれも弱いものであり，当初予想したような仮想的有能感はポジティブ・ネガティブ経験に自尊感情ほど左右されないものという見方も成立する。本研究でとりあげられたポジティブ・ネ

ガティブ経験に関する項目内容は，日常的に起こりうる事象のごく一部にすぎない。間接的な経験についてはネガティブ経験のみを準備したが，ポジティブ経験についても間接的なものは当然考えられる。この種の研究は今のところ探索的にならざるをえないが，日常的に起こりうる事象をできるだけ網羅するように経験項目を用意し，仮想的有能感の形成の影響因についてさらなる検討を行う必要があろう。

研 究 2

本研究では，他者軽視に基づく「仮想的有能感」という概念を提起し，研究1においてACSの構成を試みた。そして，この仮想的有能感と自尊感情は質的に異なるものであることが示された。そこで研究2では，自他の能力に対する評価およびそこから生ずる有能さの感覚と現代青年の怒りの特徴との関連を検討する。すなわち，怒りやすさや怒りへの対処に仮想的有能感と自尊感情が及ぼす影響の検討を目的とする。

仮想的有能感が高い人は，現実のネガティブ事象に遭遇した場合，相対的に自分より他者を低くみるという認知傾向が機能すると考えられる。そして有能な自分を保護するために，防衛的にネガティブ事象の原因や責任を他者に求め，結果として怒りの生起に繋がるように思われる。

他方，自尊感情の概念については様々な見方が存在する。松岡・押澤 (2001) によれば，本研究で使用した尺度を考案したRosenberg (1965) は，自尊感情を「他者と比較することによって優越感や劣等感を感じることではなく，自分自身で自己に対する尊重や価値を評定する程度である」と定義している。さらに自尊感情は「個人内基準に基づく判断で」「たとえ平均的な人間であったとしても自分が設定した価値基準に照らして自分を受容することであり，自分を尊重することである」としている。すなわち，自尊感情のような自己の有能さの感覚は，他者との比較に基づくものではないため，ネガティブ事象に遭遇してもそれが他者の責任であるか否かの判断には直接結びつかないと思われる。したがって，自尊感情の高さは怒りやすさとは関係しないと考えられる。

方法

被調査者　研究1の調査協力者であった女子短期大学生120名に対して，質問紙調査を実施した。

質問内容　Spielberger (1988) による状態-特性怒り表出目録 (以下STAXI) の日本語版 (鈴木・春木, 1994) を用いた。この尺度は怒りに関する5つの側面 (状態怒り，特性怒り，怒りの表出，怒りの抑制，怒りの制御) をとらえられるように構成されている。このうち「状態怒り」は，情動状態としての怒りの強さを測るものであり，本研究とは直接関連づけることができないため，これに関する項目は質問内容から削除された。したがって，特性怒り (9項目)，怒り表出 (7項目)，怒りの抑制 (6項目)，怒りの制御 (7項目) の4つの下位尺度がとりあげられた。「特性怒り」はパーソナリティ特性としての怒りやすさの個人差を，「怒りの表出」は怒りを外部 (他者や物) に向ける傾向を，「怒りの抑制」は怒りを内にためる (心の中に抱く) 傾向を，「怒りの制御」は怒りが外に出るの抑え，認知的に制御する傾向を測定するものであった。特性怒りに関する回答は「1: 全くあてはまらない」から「5: とてもよくあてはまる」まで，それ以外は「1: まったくしない」から「5: とてもよくする」までの5段階尺度[1]で求められた。

結果

研究1で算出された仮想的有能感および自尊感情の尺度得点の平均値 (それぞれ41.35, 29.78) を基準に被験者を高低2群に分け，これらの組合せにより次のような4群を構成した。仮想的有能感・自尊感情がともに高い群 (以下HH群)，仮想的有能感が高く自尊感情が低い群 (以下HL群)，仮想的有能感が低く自尊感情が高い群 (以下LH群)，仮想的有能感・自尊感情がともに低い群 (以下LL群) である。各群のSTAXI下位尺度得点の平均値をTable2-4に示す。なお，各下位尺度得点は，鈴木・春木 (1994) の項目分類にしたがって合計得点を算出することにより求められた。α係数は.59から.81であった。そこで，これら4群の怒りやすさおよび怒りへの対処の特徴を明らかにするために，STAXIの各下位尺度得点について仮想的有能感(2)×自尊感情(2)の分散分析を行った。

特性怒りに関しては，仮想的有能感の主効果のみが認められた [$F(1,114)=7.96$, $p<.01$]。予想どおり仮想的有能感が高い群の方が特性怒りは強かった。

怒りの表出に関しては，仮想的有能感の主効果 [$F(1,115)=7.21$, $p<.01$, 高群＞低群]，および交互作用が認められた [$F(1,115)=4.48$, $p<.05$]。そこで単純主効果の検定を行ったところ，仮想的有能感低群において自尊感情の効果が認められた [$F(1,115)=4.91$, $p<.05$, LL群＞LH群]。また，自尊感情高群において仮想的有能感の効果が認められた [$F(1,115)=11.53$, $p<.01$, HH群＞LH群]。つまり，仮想的有能

[1] 鈴木・春木 (1994) による日本語版 STAXIは4段階ないしは3段階尺度で回答が求められていたが，本研究では被調査者の回答のしやすさを考慮し，5段階尺度で回答を求めた。

感が高いほど怒りを表出しやすいこと，また仮想的有能感が低い場合であっても自尊感情が低いほど怒りの表出がなされやすいことが見いだされた。

怒りの抑制に関しては，仮想的有能感の主効果のみが認められた [$F(1,114)=3.99$, $p<.05$, 高群＞低群]。仮想的有能感が高いほど，怒りを内にためる傾向が高いことが見いだされた。

怒りの制御に関しては，交互作用のみが有意であった [$F(1,113)=4.04$, $p<.05$]。そこで単純主効果の検定を行ったところ，自尊感情高群において仮想的有能感の効果が認められた [$F(1,113)=4.16$, $p<.05$, LH群＞HH群]。自尊感情・仮想的有能感がともに高い場合には，自尊感情が高く仮想的有能感が低い群に比べて自らの怒りを認知的にコントロールすることが困難であることが示された。

Table2-4 各群ごとのSTAXI下位尺度の平均(標準偏差)および分散分析のF値

有能感	L		H		主効果		交互作用	
自尊感情	L	H	L	H	仮想的有能感	自尊感情		
特性怒り α=.81	25.46 (6.17) N=41	23.46 (4.26) N=24	27.21 (4.35) N=28	27.16 (4.78) N=25	7.96** L<H	1.14	1.02	(df_1=1, df_2=114)
怒りの表出 α=.70	17.22 (4.03) N=41	15.08 (3.76) N=25	17.61 (2.99) N=28	18.36 (3.55) N=25	7.21** L<H	1.03	4.48*	(df_1=1, df_2=115)
怒りの抑制 α=.59	17.05 (3.54) N=41	16.50 (3.20) N=24	18.75 (2.69) N=28	17.20 (3.08) N=25	3.99* L<H	3.05	0.69	(df_1=1, df_2=114)
怒りの制御 α=.77	19.98 (4.46) N=41	21.36 (4.27) N=25	20.89 (4.08) N=27	19.04 (4.04) N=24	0.76	0.08	4.04*	(df_1=1, df_2=113)

**p<.01, *p<.05

考察

分散分析の結果から，特性怒り，怒りの表出や怒りの抑制では仮想的有能感の主効果が認められた。他方，自尊感情は怒りやすさや怒りへの対処に単独での効果がみられなかった。そして，怒りの表出や怒りの制御において仮想的有能感と自尊感情の交互作用がみられた。すなわち，仮想的有能感が高い場合には自尊感情の高低に関係なく怒りの表出が高かったが，仮想的有能感が低い場合には，自尊感情が低いほど怒りの表出は高く，自尊感情が高いほど怒りの表出は低くなった。怒りの制御については，仮想的有能感が低く，自尊感情が高い群において最も平均値が高かった。仮想的有能感が低い場合には自尊感情の高さが怒り表出に抑制的に機能していると考えられ，単に仮想的有能感が低いというだけでは怒りの表出が抑制されにくいといえよう。木野 (2000) によれば，対人場面では怒り表出は抑制される傾向があり，また怒りの表出が他者に悪印象を与えがちであるという。このように怒り表出は対人関係上の問題を引き起こしやすいと考えられる。よって，自尊感情が高く，仮想的有能感が低い群は，適切な怒りへの対処能力を持つと考えられよう。

以上から，自尊感情に含まれる有能さの感覚あるいは自信と仮想的有能感に含まれるそれらには予想どおり質的な相違があり，特に仮想的有能感が怒りの生起および怒りへの対処と深く関わってくることが示された。怒りへの適応的な対処能力のある人の特徴を明らかにする上で，仮想的有能感という概念を用いることが有効であるといえよう。

討　論

本研究では筆者らが独自に提案した「仮想的有能感」という心理的構成概念について，従来の「自尊感情」という概念と対比的にその意味を検討してきた。双方ともある種の自信もしくは有能さの感覚を意味していると思われるが，ACSは有能感を直接測定するものではなく，直接的には他者を低く評価したり，軽視する傾向を測っている。しかし，その傾向は本人が仮想している有能感を反映したものだと考えた。つまり，他者軽視の背景には，他者に対する評価をくだす評価者自身の有能さに対する自己評価の高さが想定されている。仮想的有能感とは他者軽視することで感じられる有能さの感覚であると先に述べたが，自己の有能さに関する評価の高さと他者の有能さに関する評価の低さは表裏の関係で，逆に，仮想的有能感

の高い人が自分を実際以上に有能であると認識することで結果的に他者軽視が生じている可能性もある。

本研究の結果，仮想的有能感は自尊感情とはまったく異なる概念であるが，自己を過大評価する自己愛的有能感とはいくらか関連を持つ概念であることがわかった。さらに当初考えていた現代青年の怒りの情動を規定する重要な要因であることも確認された。この限りでは，新しく提起した仮想的有能感の構成概念の妥当性が概ね支持されたといえる。

本論文でこれまで触れていない重要な点としては性差の問題があげられる。研究1のデータは約3分の2が，研究2は全てが女性の被験者である。研究1の仮想的有能感について男女別に整理したところ，男性の平均値は45.77，標準偏差は8.65であり，女性の平均値は41.87，標準偏差は8.29で，t検定の結果，女性に比べて男性の方が仮想的有能感が有意に高いことが示された [$t(387)=4.29, p<.01$]。仮想的有能感は男性優位な概念であるように思われるため，男性のみを被験者として検討することで怒りとの関係についても，より明確な結果が得られるかもしれない。いずれにせよ，性差の問題も今後の検討課題である。

ところで，今後，この「仮想的有能感」の概念を用いた様々な研究が必要であり，展開できる可能性がある。第一には仮想的有能感の概念的位置づけをさらに明確にするために，関連が予想される多くの心理的構成概念との関係を検討することである。たとえば，自己に関わる心理的構成概念として，孤独感，公的自己意識，私的自己意識などとの関係，さらには共感性や社会的スキルなど対人関係に関わる心理的構成概念との関係も検討されるべきであろう。今後この概念を用いた多面的な研究を進める中で，「仮想的有能感」の意味内容およびその形成過程や機能をさらに解明していく必要がある。

第二は発達的視点や社会文化的視点からの探求である。現代の青年たちは，少子化の影響で小さい頃から大切に育てられ，自分の思うままに振る舞うことができるようになり，豊かな社会のもと，科学技術の進歩によって電子機器等を誰もが自由自在に使えるようになった。さらに，個人主義が浸透し，他者との親密なつきあいが減少してきている。これらの社会状況により，現代青年は閉じた個人内では有能さを感じる機会が多くなったように思われる。しかし，社会での競争は益々厳しさを増しており，実際に行動をして社会に自分を晒せば，自分では目標達成ができない場面に多く遭遇し，こうした有能感は傷つく危機に晒されることになる。そこで，防衛的に他の事態で他者軽視をすることで自己の有能感を保とうとする傾向が強まると予想される。本研究では仮想的有能感を，こうした新しい

文化の中で現代青年が身につけたものとして位置づけた。だが，個人主義や自由主義的文化が実際にこの仮想的有能感の形成においてどれほど重要な役割を果たしているかを検討するためには，発達的視点や比較文化的視点を取り入れた研究が必要であろう。そして教育的な視点からはこの仮想的有能感の形成においてどのような働きかけがそれを抑制するのかを明らかにすることも視野に入れるべきである。

さらに第三は怒りだけでなく他の情動の生起についても仮想的有能感の概念を用いて説明できる可能性である。近年ますます心の教育が重視され，教育現場では様々な心の教育への取り組みがなされているが，現代青年の心（情動）を解明するアプローチの一つとして，この仮想的有能感の問題にも関心が払われるべきではないだろうか。本研究から怒りが仮想的有能感に少なからず影響を受けていることが示されたが，悲しみや喜びなど，他の情動生起もこの次元と無関係ではないと推測される。たとえば，悲しみについては，仮想的有能感が低い場合の方が生じやすいのかもしれない。喜びに関しても，仮想的有能感の高い人と低い人では喜びの内容や質がかなり異なるように思われる。これらのことを検討する場合，本研究で試みたように仮想的有能感だけでなく，自尊感情も組み合わせることにより，より精緻な予測が可能となるように思われる。両者は類似しているようにみえて独立した概念であり，それ故，複雑な予測も可能な枠組みと考えられる。

引用文献

Baumeister, R. F. 1998 The self. In D. T. Gilbert, S. T. Fiske, & G. Lindzey (Eds.) *The Handbook of Social Psychology. 4th edition.* Vol.1. New York: McGraw-Hill. Pp. 680-740.

Barr-Zisowitz, C. 1999 "Sadness" is there such a thing? In M. Lewis, & J. M. Haviland-Jones (Eds.) *Handbook of Emotions. 2nd edition.* New York: Guilford Press. Pp.607-622.

遠藤辰雄 1992 セルフ・エスティーム研究の視座 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千壽（編） セルフ・エスティームの心理学 ナカニシヤ Pp.8-25.

遠藤由美 1999 「自尊感情」を関係性からとらえ直す 実験社会心理学研究, **39**, 150-167.

福島章 1992 青年期の心 －精神医学から見た若者－ 講談社

Harter, S. 1982 The perceived competence scale for children. *Child*

Development, **53**, 87-97.

Hayamizu. T. 2002 From a culture of sadness to a culture of anger: In pursuit of a mechanism that has brought about this change. *Nagoya Journal of Education and Human Development*, **1**, 59-68.

速水敏彦・丹羽智美 2002 子どもたちの感情はどのように変化したか －教師の目から見た特徴－ 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学), **49**, (印刷中).

木野和代 2000 日本人の怒りの表出方法とその対人的影響 心理学研究, **70**, 494-502.

古澤頼雄 2000 青年期における自己有能感 －日本人・帰国子女日本人・日系米国人・白系米国人の比較－ 東京女子大学比較文化研究所紀要, **61**, 25-54.

町沢静夫 1998 現代人の心にひそむ「自己中心性」の病理 双葉社

松岡英子・押澤由記 2001 中学生の自尊感情を規定する要因 －学校生活要因を中心に－ 信州大学教育学部紀要, **104**, 133-143.

中里至正 1999 希薄な日本の親子関係 －その問題点を考える－ 教育と情報, **498**, 16-21.

岡野守也 2002 生きる自信の心理学: コスモス・セラピー入門 PHP新書

小塩真司 1997 自己愛傾向に関する基礎的研究 －自尊感情, 社会的望ましさとの関連－ 名古屋大学教育学部紀要 (心理学), **44**, 155-163.

小塩真司 1998 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, **46**, 280-290.

小塩真司 2001 自己愛傾向が自己像の不安定性, 自尊感情のレベルおよび変動性に及ぼす影響 性格心理学研究, **10**, 35-44.

Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton: Princeton University Press.

桜井茂男 1983 認知されたコンピテンス測定尺度 (日本語版) の作成 教育心理学研究, **31**, 245-249.

Spielberger, C. D. 1988 *Manual for the State-Trait Anger Expression Inventory (STAXI)*. Odessa, FL: Psychological Assessment Resources.

鈴木平・春木豊 1994 怒りと循環器系疾患の関連性の検討 健康心理学研究, **7**, 1-13.

高木邦子・速水敏彦 2001 悲しみと怒りの情動を分けるもの －自己責任の認知と自己愛的有能感の影響－ 日本教育心理学会第43回大会発表論文集, 561.

高比良美詠子　1998　対人・達成領域別ライフイベント尺度（大学生用）の作成と妥当性の検討　社会心理学研究, **14**, 12-24.
外山美樹・桜井茂男　2001　日本人におけるポジティブ・イリュージョン現象　心理学研究, **72**, 329-335.
山本眞理子・松井豊・山成由紀子　1982　認知された自己の諸側面の構造　教育心理学研究, **30**, 64-68.

研究３　青年の有能感タイプと日常生活の感情経験

経験抽出法（ESM）による検討

問 題 と 目 的

現代青年の感情経験の特徴

テストの結果が悪かったときや，先生に注意されたときなど，客観的には同一の事象を経験しても，それにより「悲しみ」を主に感じる人と，「怒り」を主に感じる人が居る。特に，日本の現代青年においては，「怒り」の感じやすさが特徴的であるようだ。たとえば，世代ごとの「怒り」・「悲しみ」経験を比較した Hayamizu, Kino, and Takagi(投稿中) では，自分自身が直接経験したネガティブ事象に対して「悲しみ」を感じるとする報告が中・高校生において他世代よりも少ないのに対して，「怒り」の報告は中学生と高校生が他世代に比べて多いことが示唆されている。さらに，小・中学校の教師を対象にした面接調査(速水・丹羽, 2002)からは，現在の児童・生徒たちは 20～30 年前の児童・生徒に比べ，「悲しみ」や「喜び」の情動表出が少なくなり，代わりに「怒り」の表出が顕著となったと指摘されている。

また，文化心理学においては，「悲しみ」と関連する「負い目」や「申し訳なさ」といった感情は非西洋文化圏の相互協調的自己観と関係し，対して「怒り」は西洋文化圏の相互独立的自己観と関係するとされてきた(北山,1998)が，現代の日本の若者には，「怒り」に関係する相互独立的自己観の支持が非常に強いという指摘もある(北山・唐澤,1995)。すなわち，ここでも日本の現代青年において「怒り」経験が顕著になってきたことが示唆されている。

こうした「怒りやすさ」や「悲しみにくさ」をはじめとする現代青年の感情経験における特徴は何に起因するのであろうか。

「怒り」と「悲しみ」の喚起要因

一般に，「怒り(anger)」は，ネガティブな出来事が他者の責任で生じた際に喚起されるとされている(Roseman,1991; Smith and Ellsworth, 1985 など)。一方，日本語で「悲しみ」と呼ばれる感情は，英語では Sadness(Sorrow)や，Distress，Regret，または Guilt などに近いと考えられるが，それぞれについて次のような知見が得られている。まず Sadness については Smith and Ellsworth(1985)が，状況要因によりネガティブな出来事が生じたと認識された場合に喚起されるとしている。また，Roseman(1991)は，状況や環境要因により予想に反してポジティブな結果が出なかった際に Distress が，同じく状況や環境要因により予想外にネガティブな結果が生じた場合に Sorrow(後に Sadness と変更)が生じると述べている。さらに，ポジティブな結果が予想される事態で自己要因によりポジティブな結果が示されなかった際に Regret や Shame が，ネ

ガティブな結果が生じた際にRegretやGuiltが喚起されることも指摘されている(Roseman,1991)。以上をまとめると，「怒り」は他者への視点との，「悲しみ」は状況・環境や自己への視点と関係するといえよう(Smith & Ellsworth, 1985)。

以上の知見を踏まえると，「怒り」はネガティブな結果を他者に帰属した場合に喚起されることから，怒りやすい人はネガティブな出来事を他者のせいにしやすい人，すなわち他者の能力評価が低い人が多いと推測できる。また，「悲しみ」は他者よりも自身の能力を低く評価している場合に経験されやすいことから，自身の能力評価が低い人が多いと考えられる。このように，「怒り」「悲しみ」といった感情反応は，自己と他者の能力評価と関係することが推測される。

そこでHayamizu, Kino, and Takagi (2003)は，自身と他者の能力や力量のとらえ方が感情経験に及ぼす影響を検討した。Hayamizuらは，自身の能力評価の視点として従来扱われてきた自尊感情(self-esteem: SE)を，他者の能力評価の視点として現代青年に特徴的とされる他者を見下す傾向(香山，2005; 諏訪，2005 など)を取りあげ，他者軽視にもとづく仮想的有能感(Assumed Competence: AC)という概念を提案した(Hayamizu, et. al., 2003，速水, 2006)。そしてSEとACから現代青年の「怒り」・「悲しみ」経験の特徴を説明しようと試みた。

仮想的有能感（AC）と自尊感情（SE）による有能感の分類

Hayamizu, et. al.(2003)によると，仮想的有能感(AC)は，「自己の直接的なポジティブ経験に関係なく，他者の能力を批判的に評価・軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚」と定義される。Hayamizuらは，こうした定義にもとづきACを測定する尺度を作成，改訂し，現在ではACS-2という尺度を使用している。

自尊感情(self-esteem: SE)が自分自身への認知であり，かつ現実の能力の高さや現実の成功・失敗経験を反映すると考えられるのに対して，AC は他者の認知にかかわるものであり，また必ずしも自身の現実の能力とは関係しないという点で両者は概念的に区別される(速水・木野・高木,2005)。先行研究においてもACとSEの関係はほぼ無相関であることが一貫して確認されている(速水・木野・高木,2004; Hayamizu, Kino, Takagi & Tan, 2004 など)。こうしたことから速水(2005)は，自身をどのように見なすか（SE）と，他者をどのように見なすか（AC）の高低の組み合わせにより，有能感のタイプを「全能型」，「自尊型」，「仮想型」，「萎縮型」の四つに分類し(Figure3-1)，有能感タイプごとに「怒り」・「悲しみ」といった感情経験の特徴が異なる可能性を示唆している。以下に，各有能感タイプの特徴を述べる。

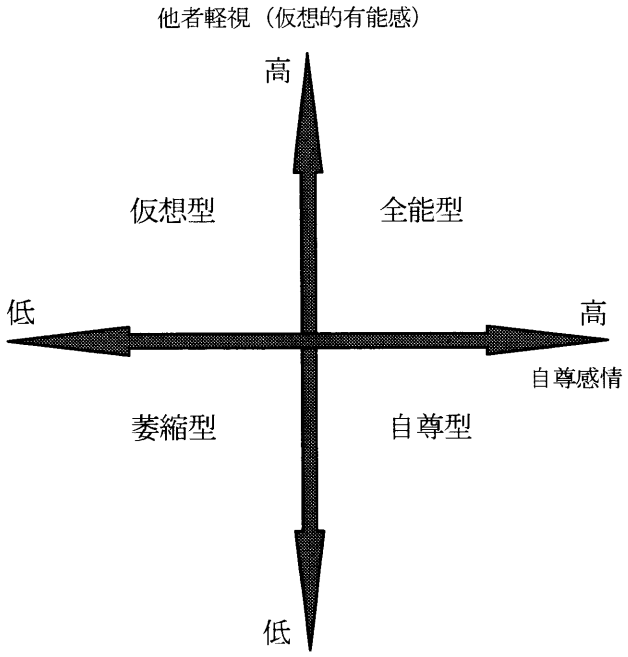

Figure3-1　有能感タイプの分類

全能型　「全能型」は，SE，AC ともに高い有能感タイプである。このタイプの中には，現実の能力も高く成功経験も豊富な人物，すなわち実際に高い能力を有する人物も含まれ得る。しかしながら，自尊感情が高いだけでは人格発達上健全ではないという Hwang(2000)の指摘にあるように，自尊感情が高く他者軽視もまた高い（すなわち他尊感情が低い）「全能型」は，両者のバランスは必ずしも適応的とは言い切れない危うさを孕んだ有能感タイプであるといえよう。諏訪(2005)は，1980 年代頃からの高校生がそれ以前と比べて変わってきたと指摘し，それを「オレ様化」と呼んでいる。諏訪が述べた「オレ様化した子どもたち」の主な特徴は，(1)他者からの批判や注意を拒むようになり，注意されると自身の全人格が否定されたかのように受け取ること，(2)理想的な自分像との比較や，他者と自身との比較といった「比較」をしなくなり，自分自身が「特別」だと思っていること，である。彼らはまた，「オレ様」という言葉に示されるように，他者を見下すような言動を示す。すなわち，「全能型」タイプは諏訪の指摘した「オレ様化」した若者の姿に近いものかもしれない。このタイプの感情経験は，後に述べる「仮想型」と同様，「怒り」の情動経験が顕著であると考えられる。

自尊型　「自尊型」は，SE は高く，AC が低い有能感タイプである。すなわち自己評価は高いが，それが他者軽視とは結びつかない。前述の Hwang(2000)の指摘に沿うならば，自尊感情と

他尊感情の両者が高い，健全な意味での有能感を有するタイプと言うことができよう。自尊感情の高さは時にはその低下を防ぐため「怒り」を喚起することもあるかもしれないが，他者軽視が低い，すなわち他者を尊重していることから相互協調的自己観の影響を受けていると考えられる。そのため，「怒り」の経験よりもむしろ「悲しみ」の経験が多いことが推測される。

仮想型　「仮想型」は，SE は低く，AC が高い有能感タイプである。他者軽視が顕著なため，一見したところ有能感が高いように見えるが，実は SE が低いという人が分類される。自信が無いにもかかわらず虚勢を張って他者を見下し，それにより間接的に有能感を高めようとしているタイプであるといえよう。このタイプには，有能感が低すぎることから回避するという防衛的な意味合いがあると考えられる。香山(2005)は，今の時代は全ての人の中に「実は自分が一番バカなのではないか」という恐れが強く，そのため他者から「バカ」扱いされる前にこちらから相手に「バカ」というラベルを貼ることで，自分は「バカ」ではないと自身を守るという行動が見られると指摘している。この香山が指摘する人間像は仮想型の人物の説明となるのではないか。このタイプの人は，ネガティブな事象を他者のせいに帰属しがちであり，そのため「怒り」を顕著に経験すると推測される。

勉強やスポーツが苦手で劣等感をもつことが多い子どもが，そうした「劣等コンプレックス」を覆い隠すために非行などの誤った方法で優越感を感じようとする行動をとることがある(Lundin,1990)。松尾(2004)は，この劣等コンプレックスの影響の例として，勉強が苦手な子どもが，盗んできたものを見せびらかしたり，みんなの前でタバコを吸ったり，けんかをふっかけたりして「悪い事ならだれにも負けない」ということを周囲の人にも，自分自身にも印象付ける行動をすると述べている。また，非行を行なう子供達の中には，実際には“「自分はみんなのようにまともな方法で立派な大人にはなれない」という強い不安をもっている者も少なくない”と指摘している(松尾,2004,p.202)。すなわち，劣等コンプレックスの持ち主は，自尊感情が低いにもかかわらず他者を見下すような態度をとる仮想型と近い特徴を持つのかもしれない。

萎縮型　「萎縮型」とは，SE，AC ともに低い有能感タイプである。自尊感情が低いが，それに対して他者軽視による防衛という手段を取らないため，仮想的な有能感すら認められない。もっとも自信の無いタイプと言えよう。このタイプでは，ネガティブな出来事に直面した際，他者に責任を帰属するよりもむしろ自身のせいへ帰属することが多いと推測される。そのため，顕著に「悲しみ」を経験しやすいことが予想される。

有能感群と感情経験　Hayamizu, Kino, & Takagi(投稿中)では，中学生から成人までを７つの年齢群に分け，提示された自身が直接かかわるネガティブ事象（個人事象）と社会的なニュースなど自身は直接関与しないネガティブ事象（社会事象）に対する感情反応をそれぞれ上記の有能感タイプ間で横断的に比較した。結果，青年期では「仮想型」と「全能型」では個人事象に対して「悲しみ」よりも「怒り」を顕著に感じるが，自身が直接関与しない社会事象については感情反応が認められないという結果が得られている。一方，「自尊型」と「萎縮型」タイプでは「仮想型」や「全能型」よりも強い「悲しみ」が報告された。この結果は，感情経験の違い

が有能感タイプにより説明可能なことを示唆している。

こうした，「怒り」と「悲しみ」との関連が指摘されている有能感タイプであるが，その他の感情とこれら有能感タイプとの関係はどのようなものであろうか。たとえば自尊型では全体的に感情状態が安定しているためポジティブな感情の報告が多いが，全能型では他者との関係における苛立ちなどのネガティブ感情が強いかもしれない。あるいは，仮想型では他者に対するネガティブな感情が，また萎縮型では自身に関連するネガティブな感情の報告が多いとも考えられる。そこで，本研究では，各有能感群における「怒り」と「悲しみ」の程度比較のみでなく，各群の全般的な感情経験の特徴を示すことを目的として検討を行なった。

経験抽出法(Experience Sampling Method: ESM)

前述の Hayamizu, et al. (投稿中) では，普段の生活で経験されると考えられるネガティブな出来事（自身が直接かかわる「個人事象」と，事件のニュースなどの「社会事象」から成る）を文章で提示し，それらの場面に直面した際に感じる「怒り」と「悲しみ」の感情反応を推測して回答するよう求めて得た感情反応を従属変数として検討している。しかしながら，有能感をある程度持続した特性的なものであると考えると，個々の事象に対する感情反応のような限定されたものではなく，有能感タイプは全般的な感情反応と関係すると考えられる。また，質問紙調査により得たこれらの反応は，現実にその場面に直面した際に喚起される感情そのものでなく，推測されたものであるため，感情反応よりもむしろ認知傾向を測定していると見なすこともできる。仮に，これらの反応が回想的になされたとしても，強く喚起された情動は記憶に残りやすいため報告され得るが，気分や情緒といった弱い感情については報告され得ないものである。

以上から，本研究では経験抽出法（Experience Sampling Method: ESM）により，日常生活全般における全般的な感情経験をリアルタイムでとらえ，有能感タイプ間で比較することを目的とする。ESM は，Csikszentmihalyi(1987)が考案した日常生活での感情経験を抽出する方法である。調査期間は一般に一週間程度であり，その期間内に毎日決まった回数，アラーム時計や携帯電話などをランダムな時間に鳴らし，その都度，手持ちの質問冊子に回答を求める。これにより，現実場面での感情経験の特徴が得られ，また質問紙法や回想法などでは捉えきれない弱い情緒経験の報告もまた得られうると考えられる。

方 法

事前調査

大学生 208 名(男性 106 名，女性 102 名)を対象に，講義時間内に事前調査用紙と本調査協力依頼書を配布して回答を求めた。

事前調査用紙では，(1) ACS-2: 仮想的有能感（AC）の測定尺度(11 項目，5 件法)（Hayamizu, Kino, Takagi, and Tan, 2004 より），(2)SE 尺度: Rosenberg (1965)による SE 尺度を山本・松井・山成 (1982)が邦訳したもの(10 項目，5 件法)，への評定を得た。

事前調査終了後，ESM 調査の概要を説明し，調査協力の意思がある場合には調査依頼書への回答欄に連絡先を記入の上，提出を求めた。

本調査

本調査への協力を承諾した協力者に後日連絡して説明会を開き，本調査手続きを詳しく説明して質問冊子を手渡した。

調査は 2005 年 11 月 10 日(水)～11 月 16 日(火)に実施した。調査期間中は，毎日午前 8 時半から午後 11 時半までを 3 時間ずつ 5 つのブロックに分け，各ブロックで乱数を用いて決定した時刻に質問紙への記入を求めるシグナルメールを送信した。したがって協力者は 1 日につき 5 回，ランダムな時間にシグナルメールを受信したことになる。協力者には，シグナルメールを確認したら可能な限り早く，質問冊子の該当ページに回答をするよう求めた。

質問冊子は，シグナルメールごとに(1)メール受信時刻，(2)用紙記入時刻，(3)その時の活動，誰と居たか，何をしていたか，についての記述を得た上で，(4)そのときの感情状態について評定を求めた。感情状態の測定項目は，独自に作成した 9 項目であり，「ここちよい―不快な」「疲れた－元気な」など，相反する感情状態を両端に置く SD 法形式に対して 7 段階で評定を求めた(項目の詳細は Table1 参照)。

さらに，一日の最後のシグナルメール時には，通常の回答ページに加え，(5)一日のまとめとして(a)良かったこと，(b)悪かったこと，をそれぞれ挙げられるだけ記述するよう求め，(6)一日の総合評価として，その日一日を振り返り，全体としてどのような日であったかについて「とても良い日(1)」から「とても悪い日(7)」までの 7 段階で評定を求めた。

調査期間終了後に 1 週間分の調査用紙を回収し，謝金支払いの手続きを行なった。最終的には 99 名(男性 49 名，女性 50 名)の ESM 調査用紙を回収した。

結 果

有能感タイプの分類

事前調査で得た ACS-2 と SE 尺度の評定より，AC 得点(M=29.94, SD=6.73, α= .80)，SE 得点(M=30.92, SD=7.61, α= .84)を算出した。AC 得点と SE 得点の相関はこれまでの研究結果と同様，無相関であった(r= - .08, *n.s.*)。SE と AC についてそれぞれ平均点を基準として高群・低群に分けて組みあわせ，本調査協力者を，SE と AC のどちらも高い「全能型」(n=23)，SE は高く，AC が低い「自尊型」(n=29)，SE は低く，AC が高い「仮想型」(n=26)，どちらも低い「萎縮型」

(n=21)という 4 群に分類した。なお，本調査への協力の意図と有能感タイプの関連についてクロス集計し，χ^2検定をおこなった結果，有能感タイプと協力の有無には関連は認められず（$\chi^2(3)=0.05$, *n.s.*），有能感タイプと協力の意図との間には特に偏りがあるとは言えないことが示された。

日常生活における感情経験の特徴

9つの各感情項目について 35 回（1日5回を1週間分）にわたる回答の合計得点を求め，これを各感情得点とした。有能感タイプごとの各感情得点の平均および標準偏差を Table3-1 に，また，高得点ほど肯定的感情を示すよう項目を適宜逆転させてグラフ化した結果を Figure3-2 に示す。

Table3-1 各有能感タイプの感情得点と分散分析結果

	全能型	自尊型	仮想型	萎縮型	*F*値
Q1. ここちよい-不快な					10.85 ***
n	17	24	19	15	*df*=(3,71)
M	119.18	113.04	131.42	133.73	「萎」「仮」>「全」「自」
SD	9.80	16.60	13.66	9.27	
Q2. 疲れた-元気な					3.84 *
n	17	24	18	16	*df*=(3,71)
M	124.76	130.71	115.22	111.63	「自」>「萎」
SD	15.95	24.75	21.46	10.39	
Q3. 幸せな-不幸せな					7.98 ***
n	17	24	19	16	*df*=(3,72)
M	122.00	112.63	131.05	132.38	「仮」「萎」>「自」
SD	11.36	17.90	14.20	13.26	
Q4. いらいらした-おちついた					9.73 ***
n	17	24	19	15	*df*=(3,71)
M	161.18	176.54	156.89	148.13	「自」>「全」「仮」「萎」
SD	13.13	19.44	19.95	11.79	
Q5. 不安な-安心した					10.95 ***
n	16	24	19	15	*df*=(3,70)
M	150.19	168.00	147.84	139.20	「自」>「全」「仮」「萎」
SD	14.91	18.78	17.30	12.25	
Q6. 集中した-気が散った					2.60 +
n	16	24	19	15	*df*=(3,70)
M	127.31	122.75	131.89	133.53	
SD	13.01	15.46	13.05	10.57	
Q7. 悲しい-楽しい					8.07***
n	16	23	19	16	*df*=(3,70)
M	161.94	169.70	154.89	148.31	「自」>「仮」「萎」
SD	12.54	17.72	14.55	8.40	「全」>「萎」
Q8. リラックスした-緊張した					7.96***
n	17	23	19	16	*df*=(3,71)
M	113.94	102.52	118.16	127.63	「萎」「仮」>「自」
SD	15.34	16.29	21.03	9.00	
Q9. 嬉しい-腹立たしい					7.04***
n	17	23	18	15	*df*=(3,69)
M	126.71	115.17	132.78	135.00	「萎」「仮」>「自」
SD	10.16	20.44	14.14	9.40	

+p<.10, *p<.05, ***p<.001「全」=全能型,「自」=自尊型,「仮」=仮想型,「萎」=萎縮型

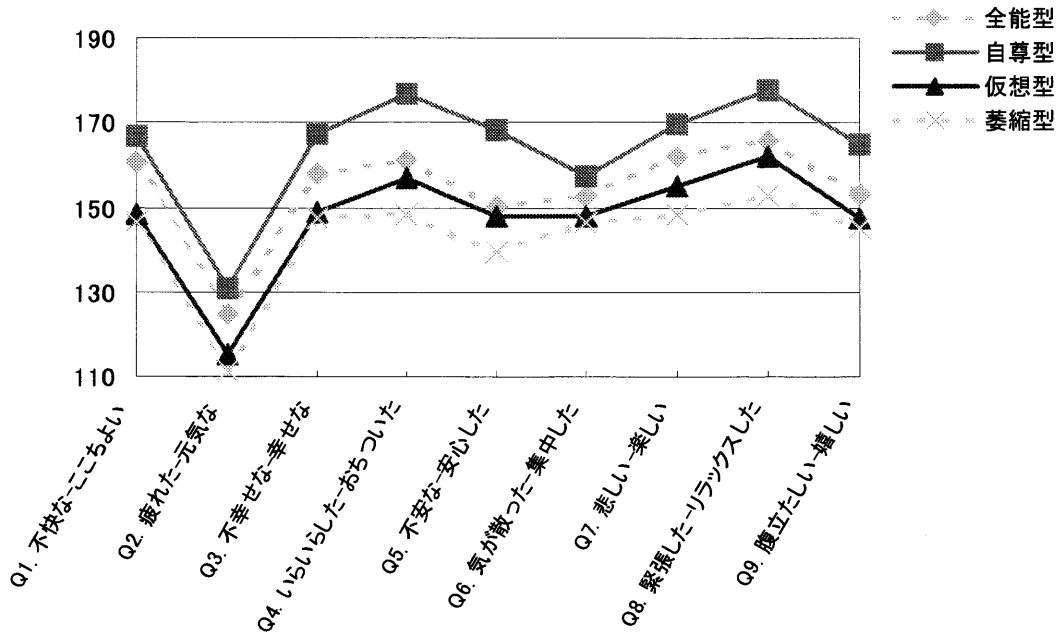

Figure3-2　各有能感型の感情得点

（注： Q1,Q3,Q6,Q8,Q9 については逆転項目として得点処理済）

各感情得点について有能感タイプ間での差異を検討するために，一要因分散分析および Tukey 法による多重比較を行った結果，項目６「集中した—気が散った」以外の項目について，有能感タイプによる感情得点の違いが見られた。

項目１「ここちよい—不快な」については，「萎縮型」「仮想型」は「全能型」「自尊型」より有意に得点が高く（$F(3,71)=10.85$，$p<.001$，多重比較は $p<.05$），「全能型」「自尊型」の方が日常的にここちよいと評価していることが示された。

項目２「疲れた—元気な」については，「自尊型」は「萎縮型」に比べて有意に得点が高く（$F(3,71)=3.84$，$p<.05$，多重比較は $p<.05$），「自尊型」の方が日常的に元気であると評価していることが示された。

項目３「幸せな—不幸せな」，項目８「リラックスした—緊張した」，および項目９「嬉しい—腹立たしい」については，「仮想型」「萎縮型」は「自尊型」に比べて有意に得点が高く（項目３：$F(3,72)=7.98$，$p<.001$；項目８：$F(3,71)=7.96$，$p<.001$；項目９：$F(3,69)=7.04$，$p<.001$。多重比較は $p<.05$），「自尊型」の方が日常的に幸せである，リラックスしている，嬉しいと評価することが示された。

項目４「いらいらした—おちついた」および項目５「不安な—安心した」については，「自尊型」は「全能型」「仮想型」「萎縮型」に比べて有意に得点が高く（項目４：$F(3,71)=9.73$，$p<.001$；項目５：$F(3,70)=10.95$，$p<.001$。多重比較は $p<.05$），「自尊型」の方が日常的におちつ

いた気持ち，安心した気持ちを報告することが示された。

項目７「悲しい―楽しい」については，「自尊型」は「仮想型」「萎縮型」に比べて，「全能型」は「萎縮型」に比べて有意に得点が高く（$F(3,70)=8.07$，$p<.001$，多重比較は $p<.05$），「自尊型」や「全能型」の人は日常的に楽しいと評価することが示された。

以上から，「自尊型」の人は他のタイプに比べ，自らの感情状態について肯定的な評価をする傾向にあることがわかった。「自尊型」の人は自己を含めた環境に対する肯定的な帰属や認知が可能であるのかもしれない。

項目４の「いらいらした―おちついた」，項目９「嬉しい―腹立たしい」はともに「怒り」と，そして項目７の「悲しい―楽しい」は「悲しみ」と，それぞれ関係する感情項目であるといえるが，特に「自尊型」についての知見のみが示されたにとどまった。

日常的な感情状態の変動

次に，日常的な感情状態の変動のしやすさと有能感タイプとの関連を検討した。まず，感情状態の変動のしやすさによって調査協力者を２群に分けるために，各個人の一週間分の項目評定値について標準偏差を算出し，これを各人の各感情に関する感情変動得点とした。そして，各感情に関する感情変動得点について中央値を求め，これを基準に変動「小」群と「大」群の２群に分けた。なお，中央値上の値は，いずれの群にも含めなかった。

一週間の感情変動と有能感タイプについてクロス集計を行い，χ^2 検定により人数の偏りを検討した（Appendix 1）。その結果，項目２「疲れた―元気な」についてのみ有意差が認められた（$\chi^2(3)=9.19$，$p<.05$）。項目２に関する残差分析の結果を Table3-2 に示す。残差分析の結果，「自尊型」では「疲れた―元気な」についての変動が大きい人の割合が高いことが示された。また，「萎縮型」では変動が小さい人の割合が低い傾向にあった。

Table3-2　「Q2.疲れた－元気な」に関する χ2 検定の結果

一週間の変動	全能型	自尊型	仮想型	萎縮型
	9	6	11	11
小	8.39	11.84	8.88	7.89
	0.34	-2.89**	1.15	1.75+
	8	18	7	5
大	8.61	12.16	9.12	8.11
	-0.34	2.89**	-1.15	-1.75+

+$p<.10$，**$p<.01$

注）上段から順に，観測度数，期待度数，調整された残差.

以上から，日々の感情変動については，「疲れた―元気な」の次元において「自尊型」の人は変動が大きいことが示された。これは，「自尊型」の人は肯定的状態へ回復するように自己をコントロールすることが容易であるためではないだろうか。なお，項目２のみにこのような結果が現れたのは，「疲れた―元気な」は，他の項目に比べ身体的な状態であるために，回答者自身が毎回の評定時にその軽微な差異を回答に反映しやすく，より正確な結果が得られやすかったためではないかと考えている。

日常生活に対する評価の特徴

全調査期間中の「一日のまとめ」より，(1)その日の良かったこと（良事象）の記述数，(2)悪かったこと（悪事象）の記述数，(3)その日はどんな日であったかの総合評価（7 件法）について一週間の平均を算出し，有能感タイプ間で一元配置分散分析を実施した。

良事象・悪事象の平均記述数のタイプ間比較　良事象の平均記述数については，一元配置分散分析において有能感タイプの効果は有意ではなかった($F(3,95)=1.83$, *n.s.*)。悪事象の平均記述数については，有能感タイプの効果は有意傾向であった($F(3,95)=2.23$, $p<.10$)が，多重比較の結果は有意ではなかった(Figure3-3,3-4 参照)。以上から，一日を振り返って印象的であった出来事の数については，良事象・悪事象とも有能感タイプとは関係しないことが示された。

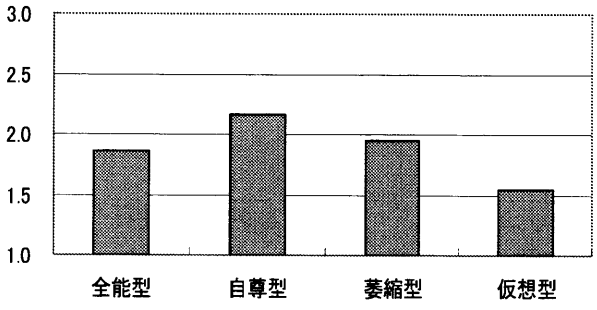

Figure3-3 良事象の平均記述数

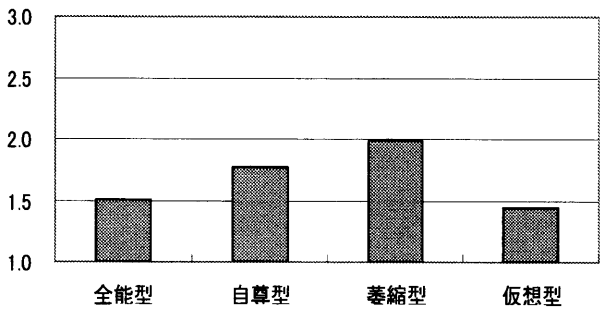

Figure3-4 悪事象の平均記述数

一日の総合評価の有能感タイプ間比較　一日の総合評価の平均得点については，一元配置分散分析の結果，有能感タイプの有意な効果が示された($F(3.89)=3.48$, $p<.05$)。多重比較の結果は，「自尊型」＜「仮想型」・「萎縮型」(ともに $p<.05$)であった(Figure3-5 参照)。総合評価得点は高得点ほどその日を「悪い日」と評価していることになる。「仮想型」と「萎縮型」はともに SE が低いタイプであるが，これらの人は，AC の高低にかかわらず，一日を振り返る際に否定的評価をしがちであるのかもしれない。それに対して「自尊型」と「全能型」ではともに SE が高いが，そのうち AC が低い「自尊型」のみが一日を肯定的に振り返ることができることが示唆され，SE が高くても AC もまた高い「全能型」では特に他のタイプとの間に有意な差は認められなかった。すなわち「自尊型」の人が，自身の生活を特に肯定的に振り返ることができる

という特徴があることが示された。この結果は，一日の総合評価が自尊感情だけでなく他者軽視の影響も受けていることを示しているといえよう。

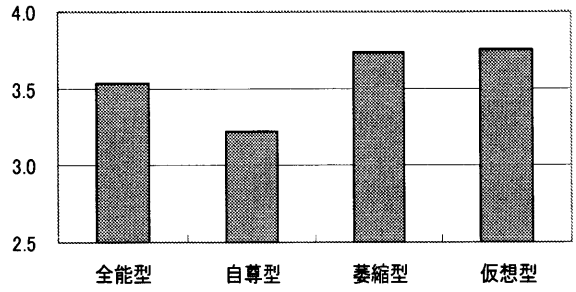

Figure3- 5 一日の総合評価

考 察

有能感タイプによる日常生活における感情経験の特徴

「怒り」「悲しみ」をはじめとした日常的な感情状態とその変動しやすさ，そして一日の評価についてのESMによる検討からは，「自尊型」の人についてのみ顕著な結果が得られた。すなわち，「自尊型」の人は，自己を含めた環境に対する肯定的な帰属や認知が可能であり，感情の回復が容易であることが示された。その一方で，自尊感情が高くても仮想的有能感も高い場合 (全能型) は否定的感情をもちやすく，また回復しがたい可能性があった。さらに，一日を振り返って良い日か否かを評価する際，「自尊型」の人は一日を肯定的に評価することも示された。

なお，一日の評価については，良事象・悪事象の報告数には統計的に有意な結果は得られなかったが，良事象の記述数は「自尊型」で多く，「仮想型」で少ないのに対して，悪事象の記述数は「萎縮型」で多く，「仮想型」で少ないことがうかがえる。「自尊型」は，一日の総合評価において「萎縮型」と「仮想型」に比べると肯定的評価を示しているが，これは「自尊型」の人が良事象に注意を向けやすいことに起因するのかもしれない。また，ともにSEが低い「萎縮型」と「仮想型」は，どちらも一日の総合評価が高得点であり，一日を否定的に評価しているタイプである。このうち「萎縮型」は，悪事象の記述数が他のタイプより多い(Figure4)ことから，「萎縮型」では悪事象に目を向けやすいことが否定的評価の原因となっていると推測できる。一方，「仮想型」では，良事象・悪事象とも報告数は多くはないにもかかわらず，一日を否定的に評価することが多い。このように，SEが低いタイプの中でも，ACとの組み合わせにより日常生活における感情経験の評価が異なる可能性が示唆されている。仮想的有能感は，その定義から根拠の無い有能さの感覚であることが特徴であるが，一日の感情経験において具

体的根拠を挙げなくてもその日を否定的に評価するという「仮想型」タイプは，自身や他者の有能さに対しても，現実的な根拠の無いまま否定的評価をする傾向が強いのかもしれない。

本研究の所見と今後の課題

本調査の結果からは，主に「自尊型」の特徴が示されたのみであり，その他のタイプである「全能型」「仮想型」「萎縮型」の特徴については明確な知見が得られなかった。今後は，「自尊型」以外のタイプについて，感情経験の特徴をさらに検討する必要があろう。たとえば，「怒り」の経験と自尊感情との関連については，不安定で高い自尊感情を持つ人物が「怒り」や「敵意」を感じやすいが，安定して高い自尊感情を持つ人物はこれらの情動を感じにくいとする知見がある(Kernis, Grannemann, and Barclay,1989)。本論では自尊感情を比較的安定した特性的なものと見なしてきたが，自己評価が低く他者軽視が高い「仮想型」は，その自他評価のアンバランスさから，他のタイプよりも有能感が不安定なタイプであるかもしれない。本調査では有能感タイプ間で情動経験の明確な差異は示されなかったが，各タイプの感情経験以外の特徴が感情経験の媒介要因となっている可能性はある。

ところで，自尊感情(SE)が同様に高くとも，他者軽視傾向(AC)の強い「全能型」と，他者軽視傾向の弱い「自尊型」との間に日常生活における感情経験の違いが認められたことは，自尊感情の高さが必ずしも好ましいとは言えないとの指摘 (Baumeister, Smart, and Boden, 1996)や，自尊感情だけでなく，他者を尊重するか否かが，健全な人格発達に重要であるというHwang(2000)の指摘を支持する結果である。このように，有能感やそれと関連する自尊心を，自己の有能さの評価という視点（自己視点）だけでなく，他者の有能さをどのように評価するのかという視点（他者視点）と組みあわせて捉えようとする動きは近年，しばしば見られるようになっている(De Jong,2001; Hwang, 2000; Karpinski,2004; 北山,1998 など)。本研究においても，有能感を自己視点と他者視点から捉えることの有用性が示唆されたといえよう。

ところで，今回の調査協力者の AC 得点平均 (M=29.94, SD=6.73)は，ACS-2 を用いた先行研究(たとえば Hayamizu, Kino, Takagi, and Tan(2004)では M=32.16, SD=7.33)に比べてやや低い値を示していた。本研究では AC 得点と SE 得点の平均値を基準に有能感タイプを分類していることから，測定するサンプルにより平均値が異なれば，高・低群を区切る基準が異なることになる。したがって，平均値のような相対的基準ではなく，絶対的なカッティングポイントを設け，有能感タイプを分類する基準を作ることがのぞましいと考えられる。

その他，ESM の方法上の問題点としては，調査協力者への負担の大きさの影響を考慮する必要があることが挙げられる。ESM は一週間という期間，調査協力者へ質問紙の持ち歩きや一日のうち不定期に何度も届くシグナルメールごとの質問紙への回答を求めており，調査協力者の負担が大きい。こうした負担の大きさが回答された感情状態に作用している可能性もある。質問冊子を持ち歩き，メール受信のたびに冊子を取り出して回答する手間を減ずるために，シグナルメールを受信した携帯電話から直接回答ができるような方法を考案するなど，協力者の負

担を軽くするための努力の余地は多分にあると考えられる。

なお，本調査では協力者に対してシグナルメール着信後，可能な限り早く回答をするよう求めたが，今回分析対象とした反応にはシグナルメール到着から数時間後に記入された遅延回答も含まれていた。だが，現実の感情状態をリアルタイムで得られるという ESM の利点を考慮すると，こうした遅延回答の扱いについても慎重な検討が必要であったかもしれない。

引用文献

Baumeister, R. F., Smart, L., & Boden, J. M. 1996 Relation of threatened egotism to violent, oppressive, and aggressive behavior: The dark side of high self-esteem. *Psychological Review*, **103**, 5-33.

Csikszentmihalyi, M. 1990 *Flow*, Harper & Row Publishers. (チクセントミハイ M. 今村浩明(訳) 1996 フロー体験 喜びの現象学, 世界思想社)

De Jong, P. J. 2001 Implicit self- esteem and social anxiety: differential self- favouring effects in high and low anxious individuals. *Behavior Research and Therapy*, **40**, 501-508.

速水敏彦 2005 仮想的有能感を求める人たち メンタルケア論 2 メンタルケア協会(編) 慶応義塾大学出版会 Pp.231-248.

速水敏彦 2006 他人を見下す若者たち 講談社現代新書

Hayamizu, T., Kino, K., & Takagi, K. 2003 Assumed-competence based on undervaluing others. *Abstract of the 8th European Congress of Psychology*, 320-321.

速水敏彦・木野和代・高木邦子 2004 仮想的有能感の構成概念妥当性の検討 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), **51**, 1-8.

速水敏彦・木野和代・高木邦子 2005 他者軽視に基づく仮想的有能感 ―自尊感情との比較から― 感情心理学研究, **12**, 43-55.

Hayamizu, T., Kino, K., and Takagi, K. (投稿中) The effects of ages and competence type on the emotions: focusing on sadness and anger.

Hayamizu, T., Kino, K., Takagi, K., & Tan, E. 2004 Assumed-competence based on undervaluing others as a determinant of emotions: Focusing on anger and sadness. *Asia Pacific Education Review*, **5**, 127-135.

速水敏彦・丹羽智美 2002 子どもたちの感情はどのように変化したか ―教師の目から見た特徴― 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), **49**, 197-206.

Hwang, P. O. 2000 *Other esteem: Meaningful life in a multicultural society*. Taylor & Francis.

Karpinski, A. 2004 Measuring self-esteem using the implicit association test: The role of the other, *Personality and Social Psychology Bulletin*, **30**, 22-34.

Kernis, M. H., Grannemann, B. D., and Barclay, L. C. 1989 Stability and level of self-esteem as

predictors of anger arousal and hostility, *Journal of Personality and Social Psychology*, **56**, 1013-1022.
香山リカ　2005　いまどきの「常識」　岩波新書
北山忍　1998　感情　認知科学モノグラフ 9　自己と感情　文化心理学による問いかけ　共立出版株式会社　Pp.75 - 101.
北山忍・唐澤真弓　1995　自己：文化心理学的視座　心理学研究, **35**,133-163.
Lundin,R. W. 1990 *Alfred Adler's Basic Concepts and Implications*, Accelerated Development.
松尾直博　2004　不適応と心理臨床　桜井茂男(編)　たのしく学べる最新教育心理学　教職にかかわるすべての人に　図書文化　Pp.185-208.
Roseman, I. J. 1991 Appraisal determinants of discrete emotions. *Cognition and Emotion*, **5**, 161-200.
Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image.* Princeton: Princeton University Press.
Smith, C. A. & Ellsworth, P, C. 1985 Patterns of cognitive appraisal in Emotion. *Journal of Personality and Social Psychology*, **48**, 813-838.
諏訪哲二 2005 オレ様化する子どもたち　中公新書ラクレ
山本眞理子・松井豊・山成由紀子　1982　認知された自己の諸側面の構造　教育心理学研究, **30**, 64-68.

Appendix 各感情の変動群と有能感型との関連

Q1. ここちよい-不快な

一週間の変動	全能型	自尊型	仮想型	萎縮型	合計
低	10	11	8	8	37
高	7	13	11	7	38
計	17	24	19	15	75

$\chi^2(3)=1.22$ (*n.s.*)

Q2. 疲れた-元気な

一週間の変動	全能型	自尊型	仮想型	萎縮型	合計
低	9	6	11	11	37
高	8	18	7	5	38
	17	24	18	16	75

$\chi^2(3)=9.19$ ($p<.05$)

Q3. 幸せな-不幸せな

一週間の変動	全能型	自尊型	仮想型	萎縮型	合計
低	9	12	7	8	36
高	7	11	12	8	38
	16	23	19	16	74

$\chi^2(3)=1.56$ (*n.s.*)

Q4. いらいらした-おちついた

一週間の変動	全能型	自尊型	仮想型	萎縮型	合計
低	11	10	8	8	37
高	6	14	11	7	38
	17	24	19	15	75

$\chi^2(3)=2.67$ (*n.s.*)

Q5. 不安な-安心した

一週間の変動	全能型	自尊型	仮想型	萎縮型	合計
低	10	10	11	5	36
高	6	14	7	10	37
	16	24	18	15	73

$\chi^2(3)=4.21$ (*n.s.*)

Q6. 集中した-気が散った

一週間の変動	全能型	自尊型	仮想型	萎縮型	合計
低	9	7	12	8	36
高	7	16	7	7	37
	16	23	19	15	73

$\chi^2(3)=5.15$ (*n.s.*)

Q7. 悲しい-楽しい

一週間の変動	全能型	自尊型	仮想型	萎縮型	合計
低	10	9	9	8	36
高	6	14	10	7	37
	16	23	19	15	73

$\chi^2(3)=2.19$ (*n.s.*)

Q8. リラックスした-緊張した

一週間の変動	全能型	自尊型	仮想型	萎縮型	合計
低	8	7	11	11	37
高	7	15	8	5	35
	15	22	19	16	72

$\chi^2(3)=5.65$ (*n.s.*)

Q9 嬉しい-腹立たしい

一週間の変動	全能型	自尊型	仮想型	萎縮型	合計
低	8	11	9	8	36
高	9	12	9	7	37
	17	23	18	15	73

$\chi^2(3)=0.16$ (*n.s.*)

研究４　The effects of ages and competence types on the emotions: Focusing on sadness and anger.

The emotional reactions of the Japanese people are said to have changed since the World War II. For example, Itsuki, a famous Japanese novelist, has pointed out in several of his essays that sadness is decreasing in Japanese modern society (Itsuki, 1996a,b). To provide empirical evidence of this phenomenon, Hayamizu (2002) reviewed the changes of Japanese emotional reactions by gathering various materials (e.g., compositions, songs, and films), and the result roughly supported Itsuki's suggestion. In addition, the results of the interviews with 68 elementary and junior high school teachers conducted by Hayamizu and Niwa (2002) showed that present-day children and early adolescents were less likely to feel sad even when they lost a class-match or a team competition in comparison to those of the previous generation. Conversely, most of the teachers stated that present-day pupils were more likely to get angry compared to those two or three decades ago. From these evidences, it is likely that Japanese society is moving from a culture of sadness to a culture of anger. That is, present-day adolescents seem to get angry more easily and less likely to feel sad than in the past.

Why do present-day Japanese adolescents tend to lose their temper easily and have a lesser tendency to feel sad? The change of perceived competence is considered as a possible cause of such emotional reactions. Several researchers indicated that the emotional reactions vary as a result of the attribution of the controllability, attainability, responsibility, and so forth (see Roseman, 1984; Sakagami, 1999; Smith & Ellsworth, 1987), which are related to the perceived competence.

Today, everyone is desperately searching for self-affirmative feelings. A quarter of century ago, Okonogi (1981) stated that Japanese society was in a narcissistic socio-psychological situation. Toyama & Sakurai (2001) also indicated that many Japanese individuals recently appear to hold positive illusions and hold excessively positive views of self-competence, in the same way as many Americans are believed to do. In spite of such tendencies, present-day people, especially adolescents, seem to have fewer opportunities to gain approvals from others in their social groups than in the past, because they do not have familiar human relations with others in their real lives. Some international surveys about students' competence revealed that Japanese students possessed a lower level of perceived competence (Kosawa, 2000) and self-esteem (Kawachi, 2003) compared to students in other countries.

On the other hand, it is assumed that some adolescents nowadays feel pseudo self-affirmative feelings. In other words, they seem to raise or sustain their evaluations of self by undervaluing others. Hayamizu, Kino, & Takagi (2003) named the tendency of having self-affirmative feelings in this way as "Assumed-competence based on undervaluing others (AC)", which is a form of illusory competence obtained by demeaning others. We theorize that undervaluing others results from the change in social situations: intimate human relations are being lost in our society, because collaboration with others has become less necessary with the reduction of manual work due to increased mechanization and computerization in industry, and Asian ideals of social collectivism have been on the decline as Western individualism penetrated Japanese society.

Here it can be argued that people are more likely to undervalue others because it needs less labor than to get approval from others. However, people may suppress any conscious

awareness of their own AC, for it is not a socially desirable tendency. Moreover, even if they are conscious, they are not willing to admit it. In order to measure the individual differences in AC, we constructed the Assumed competence scale (ACS), which was subsequently revised (ACS-2). Our studies (Hayamizu, Kino, & Takagi, 2004; Hayamizu, Kino, & Takagi, 2005; Hayamizu, Kino, Takagi, & Tan, 2004) indicated the characteristics of AC as the followings: (1) AC was not determined as much by the positive and negative experiences as self-esteem; (2) the individuals with high AC had higher trait anger than those with low AC; (3) the individuals with high AC were less likely to empathize with others than those with low AC.

At the beginning, we thought that when people coluld not succeed, they unconsciously used AC to protect their self-esteems due to the lack of their self-confidence. Later on, however, we began to doubt if all the persons who undervalue others lack confidence in their own abilities. It seems that there are two types of people who get high scores on ACS-2: one type are those who are confident and satisfied with themselves, and the other type are those who are not confident and dissatisfied with themselves. The former undervalue others because they undoubtedly regard others as having little abilities compared to their own. However, the latter are not confident and dissatisfied with themselves, but also undervalue others because they want to get self-affirmative feelings. The confusion of these two is attributed to the method measuring AC. The score of ACS-2 does not mean AC itself is an archetype, but refers to the tendency of undervaluing others as a phenotype.

Self-satisfaction or self-dissatisfaction can be measured by the self-esteem scale proposed by Rosenberg(1965). Self-esteem (SE) is a positive or negative attitude toward oneself, and one has high SE when he/she regards himself/herself as good enough. It has been shown that AC

score measured by ACS-2 was independent of SE score (Hayamizu, Kino, Takagi, & Tan, 2004). Therefore, in order to avoid confusion in interpreting AC, we tried to classify all participants into four competence types by combining AC with SE: Omnipotent type (with high AC and SE), Assumed type (with high AC and low SE), Self-respective type (with low AC and high SE) and Atrophy type (with low AC and SE), based on Hayamizu (2005). Omnipotent and Assumed types correspond to the two kinds of high AC as mentioned above. In other words, those of the Omnipotent type are satisfied with themselves but not with others, whereas those of the Assumed type are satisfied neither with themselves nor with others. Those of the Self-respective type respect not only themselves but also others, thus being satisfied with both themselves and others. The feature of those of the Atrophy type is to put themselves down but not to undervalue others; that is to say, those categorized into this type are satisfied with others although they are dissatisfied with themselves.

The main purpose of this study is to explore the effects of ages and competence types on the evocation of anger and sadness. Before this analysis, the relationships between ages and perceived competence will be examined first in order to determine the outline of developmental shift in perceived competence. As for the relationship between age and perceived competence as SE and AC, several studies (Backman & O'Malley, 1977; Hayashi, Shimonaka, Nakazato, Kawai, Satoh, Osada, & Narita, 1991) have shown that SE increases with age. On the other hand, we expect that adolescents have high AC, but it cannot be predicted whether AC decreases linearly with age. Regarding competence type, it seems that most adolescents want to gain self-affirmative feelings because of the lack of perceived confidence. Therefore the ratio of the Assumed type is expected to be larger in adolescents compared to adults.

In examining the emotional changes with ages, our previous review and thesis were based just on the inferences, insights, and indirect evidence. In addition, it is impossible to compare the emotions of present-day adolescents with adolescents in previous generation directly, because we cannot get the data of previous generation now. Therefore, we would like to compare the emotions of present-day adolescents with those of adults and middle-age persons who are believed to have more traditional Japanese values. To measure the emotional reactions, we prepared some hypothetical negative personal/social events as stimuli to evoke emotional reactions and asked the participants to respond to the question of what emotions they feel toward these events. Personal events are defined as those in which participants can experience directly in their everyday lives. Social events mean news on newspaper and TV. Negative social events that were not related to the participants would evoke different emotional responses from those of negative personal events.

Regarding the effect of ages on sadness and anger, it is hypothesized that the adolescents would show more anger toward negative personal events than the adults. On the contrary, the adults would tend to feel sad more strongly toward negative personal event compared to the adolescents. With respect to negative social events, the adolescents would be more irresponsive than the adults because we believe adolescents of the recent days may not be so interested in somebody else's business, and also the adolescents do not empathize with others as strongly as the adults (Kayama, 2005).

As for the effect of competence types, the persons of the Omnipotent and the Assumed types would get angry more strongly at negative personal events than those of the other two types because of high AC. In contrast, those of the Self-respective type would not get angry easily

with others because they are confident and do not need to criticize others in order to keep high SE. With respect to social events, however, the reverse outcome is predicted. The persons of the Omnipotent and the Assumed types are less likely to empathize with others because we hypothesize that they are more self-centered and have less regard for others compared to those of the Self-respective and the Atrophy types. Therefore, they would not feel as strongly angry and sad as people of the Self-respective and the Atrophy types when facing negative social events. In addition, we anticipate that the former would be more irresponsive than the latter.

Method

Participants

Participants were 362 students (187 males and 175 females) from two public junior high schools, 658 students (318 males and 340 females) from five public senior high school, 407 undergraduates (141 males and 266 females) from one private and one public university (below 25 years old), and 1027 adults (347 males and 680 females) who were 25 years old or older.[1] The adult data were collected from various groups: people who took part in the citizen course, attendees of a workshop for teachers, parents of kindergarteners, city-hall staffs, and so on. All institutions were located near Nagoya city. The adult data were divided into four age groups: 25 to 34 (n=191, 59 males and 132 females), 35 to 44 (n=365, 108 males and 257 females), 45 to 54 (n=273, 93 males and 180 females), and 55 to 64 years olds (n=198, 87 males and 111 females).

[1] A part of the data in high school students were also used in our previous study (Hayamizu, Kino, Takagi, & Tan, 2004).

Procedure

The homeroom teacher or lecturer administered the questionnaire to the participants in class, lecture, or workshop. In the case of the data from the kindergarteners' parents, the questionnaire was taken home and brought back after it was answered. For the city-hall staffs, the questionnaires were handed out and collected in the workplace by their manager. To ensure anonymity, all participants were instructed to omit their names on it.

Questionnaire

ACS-2. ACS-2 consisted of 11 items that describe the tendency of undervaluing others (Hayamizu, Kino, Takagi, & Tan, 2004). Participants were required to respond on a 5-point scale from 1="I never think so" to 5="I often think so." The wording of the items had been checked by the school teachers beforehand, and one item in this scale for junior high school students was modified from a double negative sentence to an affirmative sentence: from "not a few persons" to "many people."[1]

Self-esteem. The Japanese version of Rosenberg's self-esteem scale (Rosenberg, 1965), translated by Yamamoto, Matsui, and Yamanari (1982), was used. The participants were asked to respond to 10 items on a 5-point scale ranging from 1 for strongly disagree to 5 for strongly agree. In this scale again, the expression of one item for the junior high school students was modified after a teacher's request.[2] That is, the phrase of "at all" was deleted from the sentence of "At times, I think I am no good at all" to avoid the expression being too negative.

---

[1] Although one item of ACS-2 had been modified in the questionnaire for junior high school students, the scale was considered as equivalent to that of other age groups, since the coefficient alpha and I-T correlation did not shown remarkably low value (junior: $\alpha = .79$, $r = .51$; other age groups: $\alpha = .79$- .85, r=.40- .61).

[2] Concerning reliability, SE scale for junior high school students was regarded as good as the SE scale for other generations, for the coefficient alpha and I-T correlation did not shown remarkably low value (junior: $\alpha = .78$, $r = .69$; other age groups: $\alpha = .80$- .85, $r = .65$- .79).

Emotional reactions. The experiences of anger or sadness were measured in both personal and social negative events. For the personal event, the incidents that participants could experience in their daily lives were prepared as items. In the questionnaire conducted in junior and senior high school, the participants were asked to imagine themselves in eleven hypothetical situations. The questionnaire for undergraduates and adults contained eight hypothetical situations after some items were excluded or changed because of their school-specific situations. Six situations were the same throughout all questionnaires for the seven age groups. Respondents rated which emotion they would feel more strongly (anger, sadness, or neither), when they faced such events. To make the participants always choose either anger or sadness as much as possible, five alternatives were created: 1 = "Sadness is distinctively stronger than anger," 2 = "Sadness is a little stronger than anger," 3 = "Anger is a little stronger than sadness," 4 = "Anger is distinctively stronger than sadness," and 5 = "Neither emotion is felt." For analysis, they were recorded into a sadness score, an anger score, and a irresponsiveness score. That is, ratings 1 and 2 were recorded as "1", and other ratings were recorded as "0" for the sadness score. Similarly, rating 3 and 4 were recorded as "1", and the remainder was recorded as "0" for the anger score. When the rating was 5, then it was recorded as "1", and if not, it was recorded as "0" for the irresponsiveness score.

For the emotional reactions toward social events, the six incidents from Hayamizu, Kino, Takagi, & Tan (2004) were used. They were the incidents taken from the news at that time, and would have been known by the participants. Adults and university students were instructed to choose one of the six alternatives for each item: 0 = "Uncertain of the event," 1 = "Sadness is stronger than anger," 2 = "Sadness is comparatively stronger than anger," 3 =

"Anger is comparatively stronger than sadness," 4 = "Anger is stronger than sadness," and 5 = "Neither emotion is felt." For junior and senior high school students, there were four alternatives for each of the six incidents:[1] 0 = "Uncertain of the event," 1 = "Sadness is stronger than anger," 2 = "Anger is stronger than sadness," and 3 = "Neither emotion is felt." For the analysis, the ratings were recorded in the same way as personal events. However, for the junior and senior high school students, the rating of 1 was recorded as "1" for the sadness score and "0" for both of the anger and irresponsiveness scores, the rating of 2 was recorded as "1" for the anger score and "0" for both of the sadness and irresponsiveness scores, and the rating of 3 was recorded as "1" for the irresponsiveness score and "0" for both of the sadness and anger scores. The rating of 0 was treated as missing value.

Finally, the total sadness, anger, or irresponsiveness score was summed up for all six negative personal/social events. Therefore the possible score range was from 0 to 6 for total emotional reaction scores.

Results

The ACS-2 and Self-esteem scores in each age group

The ACS-2 score was the total ratings of all eleven items (M = 31.31, SD = 6.96). The internal consistency of ACS-2, coefficient alpha was .81. The SE scale score was the total ratings from all 10 items (M = 31.55, SD = 7.29). The coefficient alpha for this scale was .84.

[1] Considering the immature of emotional differentiation in young adolescents, the alternatives of emotional reactions toward the social events were cut down to four in the questionnaire for junior and senior high school students.

The correlation coefficient between AC and SE was not significant (r = -.03), suggesting that these two scales were independent. This was consistent with the findings from the previous studies (e.g., Hayamizu, Kino, Takagi, & Tan, 2004).

Table 4-1 shows the ACS-2 and self-esteem scores in each age group. In order to examine the group differences, one-way ANOVAs on AC and SE were conducted. Concerning the AC, a significant F value was found ($F(6,2398) = 9.02$, $p<.001$). The result of Tukey's HSD test indicated that AC among the junior and senior high school students and among the 55 to 64 year-old age group, was higher than that in the groups of university students and adults in the 25 to 34 and 35 to 44 year-old groups ($ps<.05$). AC was higher in the younger adolescents and the age group of 55 to 64 years old; that is, the relation between AC and age approximated a U-curve.

Table 4-1 Mean of ACS and self-esteem scores by age groups

	AC			SE		
Age group	*M*	*SD*	*N*	*M*	*SD*	*N*
Junior high school students	32.42	(7.73)	346	30.00	(6.62)	350
Senior high school students	32.03	(7.32)	654	28.69	(7.13)	652
Undergraduates (under 24 years old)	29.88	(6.81)	402	31.10	(7.34)	405
Adults from 25 to 34 years old	29.72	(6.17)	186	33.53	(6.90)	185
Adults from 35 to 44 years old	30.66	(6.34)	358	33.91	(6.75)	358
Adults from 45 to 54 years old	31.24	(6.42)	266	34.72	(6.62)	267
Adults from 55 to 64 years old	32.68	(6.23)	193	34.48	(6.31)	184

Note. AC = assumed-competence; SE = self-esteem.

When considering the age group comparison of SE, a significant group difference was also found ($F(6,2394) = 46.19$, $p<.001$). The result of Tukey's HSD test revealed that SE in the groups of junior and senior high school students and undergraduates were lower than that in the adults' groups of 25 to 64 years old. It was also indicated that the score of the high school students' group was lower than that in the university students' group (*ps*<.05). This suggests that SE increased with age.

The relationships between ages and competence types

In this study, we categorized the participants into the 4 competence types based on the two dimensions: AC and SE. By using the grand mean score of AC and SE, the competence types were classified into 4 types, that is Omnipotent, Self-respective, Assumed, and Atrophy types. Figure 1 shows the proportion of the percentage of each competence type as a function of age group.

As shown in Figure 4-1, the percentage of Omnipotent type increased with age. Concerning the Assumed type, the ratio was remarkably high in the junior and senior high school students whereas it was lower in the undergraduates and adults' groups of 24 to 54 years old. In contrast to this trend, the ratio of Self-respective type was low in the junior and senior high school students and prominent in the undergraduates and adults' groups of 24 to 54 years old. In the case of Atrophy type, the ratio increased in the adolescents and decreased with age. It showed that there was a strong tendency of young adolescents to have low self-esteem (i.e., Assumed and Atrophy types) and half of those who had low self-esteem had higher AC. This tendency changed drastically on and after the age group of undergraduates. Broadly

considered, the percentage of the types with higher AC decreased and the percentage of the types with higher SE increased after the age group of 25 to 34 years old.

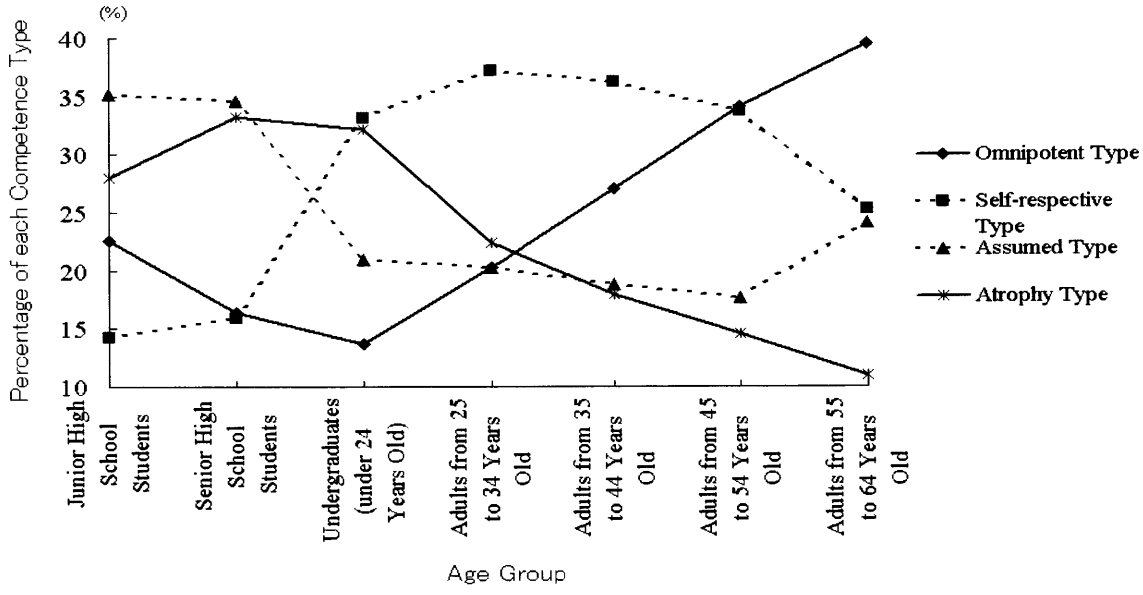

Figure 4-1 The percentage of each competence type by age groups

Note. Omnipotent type is with high AC and SE; Self-respective type is with low AC and high SE; Assumed type is with high AC and low SE; Atrophy type is with low AC and SE. AC = assumed-competence; SE = self-esteem.

Emotional reactions toward the negative personal events

Table 2 shows the representative values of emotional reaction scores for the negative personal events by each age group and competence type. The result of 7 (age groups) × 4 (competence types) ANOVA on the sadness score revealed main effects for age group ($F(6,2117) = 21.65$, $p<.001$) and competence type ($F(3,2117) = 15.85$, $p<.001$). For age group difference, the Tukey's HSD test indicated that the sadness score in junior high school students was lowest, and also the score in the senior high school students was lower than that in all the adult age groups

(25 to 64 years old). For the main effect of competence type, the Tukey's HSD revealed that the sadness scores in the Omnipotent and Assumed Types were lower than those in the Self-respective and Atrophy types.

Concerning the anger score, the result of 7 × 4 ANOVA indicated the main effects for age group ($F(6,2117) = 5.09$, $p<.001$) and competence type ($F(3,2117) = 19.43$, $p<.001$). The comparison of means using Tukey's HSD test among age groups revealed that the anger score in the junior high school students was higher than that in all the adult groups of 25 to 64 years old, and that the score in the high school students was higher than that in the adult group of 45 to 54 years old. For the main effect of competence type, the result of Tukey's HSD revealed that the anger scores in the Omnipotent and Assumed types were higher than those in the Self-respective and Atrophy types.

Regarding the irresponsiveness score, the result of 7 × 4 ANOVA indicated that significant main effects for age group ($F(6,2117) = 17.28$, $p<.001$) and competence type ($F(3,2117) = 5.47$, $p<.001$). For age group difference, the result of Tukey's HSD test indicated that the irresponsiveness score for junior high school students was highest, and also that the score for senior high school students was higher than that of undergraduates. For competence type, there was no significant difference. Therefore it was concluded that younger adolescents tended to get angry and not to become sad toward the negative personal events. Furthermore, the AC plays a role in suppressing sadness and evoking anger toward negative personal events.

Table 4-2 Emotional reaction scores for the negative personal events as a function of ages and competence types

	Junior high school students			Senior high school students			Undergraduates (under 24 years old)			Adults from 25 to 34 years old			Adults from 35 to 44 years old			Adults from 45 to 54 years old			Adults from 55 to 64 years old		
	M	*(SD)*	*n*	*M*	*(SD)*	*n*	*M*	*(SD)*	*n*	*M*	*(SD)*	*n*	*M*	*(SD)*	*n*	*M*	*(SD)*	*n*	*M*	*(SD)*	*n*
Sadness																					
Omnipotent type	1.44	(1.30)	77	1.68	(1.40)	108	1.71	(1.40)	24	2.32	(1.51)	37	2.41	(1.53)	97	2.54	(1.82)	89	2.30	(1.90)	69
Self-respective type	1.42	(1.37)	45	2.35	(1.45)	104	2.78	(1.10)	68	2.94	(1.30)	68	2.92	(1.52)	127	2.76	(1.66)	86	3.04	(1.97)	46
Assumed type	1.63	(1.46)	118	2.03	(1.39)	224	2.48	(1.11)	44	2.47	(1.75)	36	2.42	(1.71)	66	2.64	(1.77)	45	2.40	(1.96)	40
Atrophy type	1.92	(1.38)	92	2.55	(1.46)	215	2.62	(1.20)	63	3.17	(1.22)	41	2.80	(1.36)	61	3.17	(1.54)	35	3.00	(1.95)	20
Total	1.64	(1.40)	332	2.20	(1.46)	651	2.53	(1.21)	199	2.77	(1.45)	182	2.67	(1.55)	351	2.72	(1.72)	255	2.60	(1.95)	175
Anger																					
Omnipotent type	3.47	(1.67)	77	3.54	(1.49)	108	3.96	(1.43)	24	2.97	(1.48)	37	3.11	(1.60)	97	3.19	(1.81)	89	3.22	(1.80)	69
Self-respective type	2.91	(1.46)	45	3.00	(1.30)	104	2.78	(1.16)	68	2.68	(1.34)	68	2.57	(1.50)	127	2.45	(1.58)	86	2.15	(1.87)	46
Assumed type	3.48	(1.54)	118	3.33	(1.49)	224	3.27	(1.11)	44	3.19	(1.70)	36	3.26	(1.70)	66	2.73	(1.67)	45	3.10	(2.04)	40
Atrophy type	3.09	(1.53)	92	2.85	(1.44)	215	3.02	(1.22)	63	2.61	(1.38)	41	2.80	(1.49)	61	2.54	(1.46)	35	2.55	(2.09)	20
Total	3.29	(1.57)	332	3.15	(1.46)	651	3.11	(1.25)	199	2.82	(1.46)	182	2.89	(1.59)	351	2.77	(1.69)	255	2.83	(1.94)	175
Irresponsiveness																					
Omnipotent type	1.09	(1.38)	77	0.79	(1.26)	108	0.33	(0.92)	24	0.70	(1.00)	37	0.47	(0.99)	97	0.27	(0.85)	89	0.48	(1.04)	69
Self-respective type	1.67	(1.55)	45	0.65	(1.05)	104	0.44	(0.85)	68	0.38	(0.73)	68	0.51	(0.98)	127	0.79	(1.28)	86	0.80	(1.56)	46
Assumed type	0.89	(1.31)	118	0.63	(1.14)	224	0.25	(0.53)	44	0.33	(0.53)	36	0.32	(0.83)	66	0.62	(1.09)	45	0.50	(1.20)	40
Atrophy type	0.99	(1.35)	92	0.60	(1.09)	215	0.37	(0.90)	63	0.22	(0.57)	41	0.39	(0.88)	61	0.29	(0.96)	35	0.45	(0.76)	20
Total	1.07	(1.39)	332	0.65	(1.13)	651	0.36	(0.82)	199	0.40	(0.74)	182	0.44	(0.94)	351	0.51	(1.09)	255	0.57	(1.21)	175

Note. Omnipotent type is with high AC and SE; Self-respective type is with low AC and high SE; Assumed type is with high AC and low SE; Atrophy type is with low AC and SE. AC = assumed-competence; SE = self-esteem.

Emotional reactions toward the negative social events

Table 4-3 shows the representative values of emotional reaction scores for the negative social events by each age group and competence type. 7 (age groups) × 4 (competence types) ANOVA on the sadness score revealed a main effect for competence type ($F(3,1587) = 6.71$, $p<.001$). The comparison of the means using Tukey's HSD showed that the sadness scores in the Omnipotent and Assumed types were lower than those in the Self-respective and Atrophy types.

Concerning the anger score, the result of 7 × 4 ANOVA indicated the main effect for age group ($F(6,1587) = 6.75$, $p<.001$). The comparison of means using Tukey's HSD test revealed that the anger scores in the junior and senior high school students were lower than those in the adults' groups of 25 to 64 years old.

Regarding the irresponsiveness score, the result of the 7 × 4 ANOVA indicated that the significant main effects for age group ($F(6,1587) = 22.16$, $p<.001$) and competence type ($F(3,1587) = 5.03$, $p<.001$). For age group difference, the result of Tukey's HSD tests indicated that the irresponsiveness scores in junior and senior high school students were higher than those in the undergraduates and all adults' groups of 25 to 64 years old, and also the score of undergraduates was higher than those in the groups of 45 to 54 and 55 to 64 years old. For the main effect of competence type, the result of Tukey's HSD showed that the irresponsiveness scores in the Omnipotent and Assumed types were higher than that of the Self-respective type, and that the score in the Assumed type was higher than that of the Atrophy type. Broadly considered, adolescents tend to be irresponsive to negative social events. It also seems that the AC plays a role in suppressing emotional reactions, and that less AC is related to sadness in negative social events.

Table 4-3 Emotional reaction scores for the negative social events as a function of ages and competence types

	Junior high school students			Senior high school students			Undergraduates (under 24 years old)			Adults from 25 to 34 years old			Adults from 35 to 44 years old			Adults from 45 to 54 years old			Adults from 55 to 64 years old		
	M	(SD)	n	M	(SD)	n	M	(SD)	n	M	(SD)	n	M	(SD)	n	M	(SD)	n	M	(SD)	n
Sadness																					
Omnipotent type	1.74	(1.76)	46	1.67	(1.64)	82	1.45	(1.47)	22	1.71	(1.30)	31	1.90	(1.65)	84	1.90	(1.54)	79	1.58	(1.58)	66
Self-respective type	2.13	(2.03)	24	1.95	(1.87)	61	1.74	(1.48)	57	1.93	(1.54)	55	2.27	(1.71)	103	2.21	(1.61)	75	2.12	(1.75)	41
Assumed type	1.72	(1.60)	60	1.69	(1.61)	146	1.77	(1.09)	35	1.82	(1.66)	28	1.74	(1.37)	62	1.47	(1.66)	38	1.75	(1.75)	40
Atrophy type	2.43	(1.95)	44	2.01	(1.62)	154	2.07	(1.59)	54	2.09	(1.51)	32	2.37	(1.64)	46	2.47	(1.74)	32	1.89	(1.81)	18
Total	1.96	(1.80)	174	1.84	(1.66)	443	1.82	(1.45)	168	1.90	(1.50)	146	2.07	(1.62)	295	2.01	(1.63)	224	1.79	(1.69)	165
Anger																					
Omnipotent type	3.39	(2.04)	46	3.09	(1.91)	82	3.59	(1.76)	22	4.03	(1.25)	31	3.77	(1.79)	84	4.04	(1.56)	79	4.30	(1.53)	66
Self-respective type	2.92	(2.19)	24	3.52	(2.05)	61	3.89	(1.53)	57	3.98	(1.63)	55	3.64	(1.72)	103	3.72	(1.64)	75	3.76	(1.84)	41
Assumed type	3.48	(1.76)	60	3.35	(1.88)	146	3.63	(1.40)	35	3.79	(1.89)	28	4.08	(1.39)	62	4.37	(1.73)	38	4.20	(1.81)	40
Atrophy type	2.89	(1.86)	44	3.43	(1.75)	154	3.70	(1.70)	54	3.78	(1.54)	32	3.61	(1.67)	46	3.50	(1.70)	32	4.11	(1.81)	18
Total	3.23	(1.92)	174	3.35	(1.86)	443	3.74	(1.58)	168	3.91	(1.58)	146	3.77	(1.67)	295	3.91	(1.65)	224	4.12	(1.71)	165
Irresponsiveness																					
Omnipotent type	0.87	(1.68)	46	1.24	(1.84)	82	0.95	(1.65)	22	0.26	(0.63)	31	0.32	(0.81)	84	0.06	(0.25)	79	0.12	(0.33)	66
Self-respective type	0.96	(1.88)	24	0.52	(1.39)	61	0.37	(0.84)	57	0.09	(0.40)	55	0.09	(0.35)	103	0.07	(0.34)	75	0.12	(0.78)	41
Assumed type	0.80	(1.61)	60	0.96	(1.57)	146	0.60	(1.19)	35	0.39	(1.17)	28	0.18	(0.46)	62	0.16	(0.37)	38	0.05	(0.32)	40
Atrophy type	0.68	(1.47)	44	0.56	(1.21)	154	0.22	(0.95)	54	0.13	(0.42)	32	0.02	(0.15)	46	0.03	(0.18)	32	0.00	(0.00)	18
Total	0.81	(1.62)	174	0.81	(1.51)	443	0.45	(1.10)	168	0.19	(0.67)	146	0.16	(0.54)	295	0.08	(0.30)	224	0.09	(0.47)	165

Note. Omnipotent type is with high AC and SE; Self-respective type is with low AC and high SE; Assumed type is with high AC and low SE; Atrophy type is with low AC and SE. AC = assumed-competence; SE = self-esteem.

Discussion

Ages and competence type

Assumed type was dominant only in junior and senior high school students. For undergraduates, the rate of Assumed type showed sharp decrease unexpectedly. Therefore, our hypothesis about the characteristics of competence type was supported only in early adolescents. The rate of Self-respective type for undergraduates was high and this tendency was similar to the adults' groups of 25 to 54 years old. Regarding Atrophy type, the rate in undergraduates was high as well as senior high school students. According to these results, it is suggested that the undergraduates are in a transitional period of competence type from adolescence to adulthood.

In addition, it was interesting that the ratio of Omnipotent type increased with age and that it was highest in the group of 55 to 64 years old. Although both of the young and the senior participants have high AC score, the quality might be different between them. The youth may undervalue others to protect themselves, whereas the elders may undervalue others because of their overconfidence. Considering the fact that the scores of ACS-2 did not significantly rise or fall over all age groups, the change in competence types was more interesting rather than that of AC itself. In this sense, our proposal to focus on competence types was meaningful.

However, it is difficult for us to distinguish the effect of generation (i.e., cohort difference) with that of a developmental shift. In dealing with ages, we should pay attention to the fact that the different ages mean not only the differences of generation but also the developmental differences. To make this point clear, a longitudinal study or cohort analysis would be

necessary.

Emotional reactions

As far as the differences of emotional reactions among the age groups were concerned, the shift "from a culture of sadness to a culture of anger" was supported in response toward negative personal events. That is to say, the adults are more likely to feel sad than adolescents, whereas adolescents tend to feel anger more frequently than adults. It is meaningful that emotional changes along ages were verified with objective data. The difference of emotional quality may be explained by the cohort difference of culture. The views of self as "independent" were regarded as the characteristic of the western culture (Markus & Kitayama, 1991). However, Kitayama & Karasawa (1995) pointed that the "independent" self and individualistic beliefs were shown very strongly among the Japanese youth of today compared to the elderly. In this "independent" culture, people are trying to find unique attributes in themselves (Markus & Kitayama, 1991), so they sometimes assert themselves with anger. Therefore, the findings that the young adolescents feel more anger than sadness might come from their self-assertion. However, the difference of emotional reactions is also explained by developmental changes. For instance, the young tend to feel angry because they are physically active, whereas the middle-aged and the elderly people may feel sad more severely because they are physically inactive comparing to young. Concerning competence types, Omnipotent and Assumed types had less sadness and more anger than Self-respective and Atrophy types. This result supported our hypothesis that AC promoted anger and inhibited sadness.

Emotional reactions toward negative social events were different from those of personal

events. Regarding age group differences, the anger scores for junior and senior high school students were significantly lower than those for the adults in the 25 to 64 year-old groups for negative social events. Also, the irresponsiveness scores in young adolescents were higher than those in the adults of 25 to 64 year-old groups. Because the young adolescents regard negative social events as irrelevant for them (Kayama, 2005), they hardly feel angry at these events. On the competence dimension, Omnipotent and Assumed types showed lower sadness scores than Self-respective and Atrophy types and the former two types indicated higher irresponsiveness scores compared to the Self-respective type. This result suggests that the persons with high AC do not feel sadness toward negative social events, presumably because they cannot empathize with social negative events. The relationships between emotional reactions and competence types were generally consistent with the relationships of emotional reactions with AC and SE in the previous study (Hayamizu, Kino, Takagi, & Tan, 2004).

Issues on the method

This study has some limitations in the research design. First, our classification criteria of competence types were not absolute but relative ones. Thus the competence types we assigned here are expected to shift depending on the research sample. Instead of classifying the groups by the grand mean, it seems better for the data analysis to assign only the persons who showed extreme scores of AC and SE in the four types. However, it was necessary for us to use mean scores as cutoff points of competence types in this study because of small samples for each age group. We would need to decide on definite and absolute cutoff points by gathering a larger sample. If it is possible, the next study will show clearer results than the present study.

Second, our participants were not based on random sampling. For example, the sex distribution of our sample had a higher proportion of women. Thus, our results might be influenced by women's characteristics to some extent. It is necessary to examine sex differences of competence types and emotional reactions in future research. Furthermore, the number of participants in the adults' group of 25 to 34 years old is fewer than those in other age groups in this study. We also did not collect data on adolescents who were full-time employees. We should make an effort to equalize the sample size of each age group, and get working adolescents' data in the next study.

The third issue is related to the measurement of emotional reactions. We dealt with anger and sadness as opposite in their nature. In reality, however, some persons have not only fierce anger but also severe sadness. In this case, anger and sadness should be measured separately. In spite of these several limitations in our method, a new field of emotional study was pioneered in this article.

References

Backman, J. G., & O'Malley, P. M. (1977). Self-esteem in young men: A longitudinal analysis of the impact of educational and occupational attainment. *Journal of Personality and Social Psychology*, **35**, 365-380.

Hayamizu, T. (2002). From a culture of sadness to a culture of anger: In pursuit of a mechanism that has brought about this change. *Nagoya Journal of Education and Human Development*, **1**, 59-68.

Hayamizu, T. (2005). People who seeks for the assumed competence. In Mental Care Association (ed.), *Mental care theory 2*. Keio University Press. pp.231-248. (in Japanese, translated by the authors of this article)

Hayamizu, T., Kino, K., & Takagi, K. (2003). Assumed-competence based on undervaluing others. *Abstract of the 8th European Congress of Psychology*, 320-321.

Hayamizu, T., Kino, K., & Takagi, K. (2004). Examination of construct validity of assumed-competence scale. *Bulletin of the Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University (Psychology and Human Developmental Sciences)*, **51**, 1-8. (in Japanese with English abstracts)

Hayamizu, T., Kino, K., & Takagi, K. (2005). Assumed-competence based on undervaluing others: comparing with self-esteem. *Japanese Journal of Research on Emotions*, **12**, 43-55. (in Japanese with English abstracts)

Hayamizu, T., Kino, K., Takagi, K. & Tan, E. (2004). Assumed-competence based on undervaluing others as a determinant of emotions: Focusing on anger and sadness. *Asia*

Pacific Education Review, **5**, 127-135.

Hayamizu, T., & Niwa, T. (2002). Changes in the emotions of pupils nowadays: Based on group-interviews with teachers. *Bulletin of the Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University (Psychology and Human Developmental Sciences)*, **49**, 207-215. (in Japanese with English abstract)

Hayashi, Y., Shimonaka, Y., Nakazato, K., Kawai, C., Satoh, S., Osada, Y., & Narita, K. (1991). A cross-sectional comparison of life-span development (5): focusing on self-esteem. *Proceedings of the 55th annual meeting of Japanese Psychological Association*, 471. (in Japanese, translated by the authors of this article)

Itsuki, H. (1996a). *Mind and body*. Shueisha. (in Japanese, translated by the authors of this article)

Itsuki, H. (1996b). *Hints on how to live 4.* Bunka Publishing Bureau. (in Japanese, translated by the authors of this article)

Kayama, R. (2005). *"Commonsense" of today.* Iwanami Shoten. (in Japanese, translated by the authors of this article)

Kawachi, K. (2003). *Ways to raise one's confidence.* Tokyo: Asahi Shinbun. (in Japanese, translated by the authors of this article)

Kitayama, S., & Karasawa, M. (1995). Self: A cultural psychological perspectives. *Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, **35**, 133-163. (in Japanese with English abstract)

Kosawa, Y. (2000). Perceived self-competence in adolescents: A comparison among Japanese, Japanese returnee students, Japanese-Americans, and Caucasoid Americans (in Japanese,

translated by the authors of this article). *Annals of the Institute for Comparative Studies of Culture, Tokyo Woman's Christian University,* **61**, 25-54.

Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implication for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, **98**, 224-253.

Okonogi, K. (1981). *Narcissistic human: Modern theory of narcissism.* Asahi Press. (in Japanese, translated by the authors of this article)

Roseman, I. J. (1984). Cognitive determinants of emotion: a structural theory. In P. Shaver (Ed.), *Review of personality and social psychology: V. Emotions, relationships, and health.* Beverly Hills. CA: Sage. pp.11-36.

Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image.* Princeton: Princeton University Press.

Sakagami, H. (1999). Individual differences in cognition of affective information: Affective traits and style of interpreting affective content of ambiguous figures. *Japanese Journal of Educational Psychology,* **47**, 411-420. (in Japanese with English abstract)

Smith, C. A., & Ellsworth, P. C. (1987). Patters of appraisal and emotion related to taking an exam. *Journal of Personality and Social Psychology,* **52**, 475-488.

Toyama, M., & Sakurai, S. (2001). Positive illusions in Japanese students. *Journal of Psychology*, **72**, 329-335. (in Japanese with English abstract)

Yamamoto, M., Matsui, Y., & Yamanari, Y. (1982). The anatomy of the perceived self (in Japanese, translated by the authors of this article). *Japanese Journal of Educational Psychology,* **30**, 64-68.

今後の展開

本報告では、「他者軽視に基づく仮想的有能感」が、怒りや悲しみの感情生起を規定しているのではないかと考え、まず、仮想的有能感を測定する尺度を作成し（研究１）、その概念的検討を行い（研究２）、仮想的有能感と日常的な感情生起の関係を捉え（研究３）、さらに、特に個人的出来事および社会的出来事に対する怒りと悲しみの相対的強さとの関係について（研究４）検討を重ねてきた。そして、研究を進める中での新しい展開は、仮想的有能感を単独で用いるのでなく、自尊感情との絡みで４つの有能感タイプとして概念化したことである。本来、仮想的有能感はあまり意識されない、無意識的なものとして位置づけてきたが、他人を見下して自分に有能さを感じるという心理的メカニズムは、本人自身が一定程度自信をもっているから生じることもあるし、逆に劣等感の裏返しとして生じることもあるように思われる。その二つの区別が仮想的有能感と自尊感情を同時に査定することで可能になったといえる。

これは新しい研究の枠組みなので今後さまざまな展開が可能であるが、現在のところ主に４つの研究方向を考えている。

第一はこれまでは「怒り」と「悲しみ」の感情にほぼ限定して考えてきたが、その他の感情と有能感タイプとの関係を探ることである。怒りや悲しみのようなネガティブな感情だけでなく、喜びや笑いのようなポジティブな感情の質も有能感タイプによって異なると予想される。たとえば、これは現在実際に進行中の研究であるが、笑いに関して言えば仮想型の人たちは皮肉や他者をけなすことによる笑いが多いのに対して自尊型の人たちは他人を和ませたり支援したりするような笑いが多いことが予想される。さらに喜びに関しても仮想型の人たちは他の人たちとともに喜ぶことができないように思われる。

第二は感情ではなく、動機づけとの関係である。動機づけは自分をどうとらえるかという認知、すなわち、ここでは自尊感情と密接に関係することは十分予想できる。しかし、最近の動機づけの理論の中には他者との人間関係のあり方を問題にする考えも出てきている。その意味で他者軽視に基づく仮想的有能感は他者をどうとらえるかの認知の問題ともいえ、動機づけと何らかの関係が予想される。実はこの種の研究も既にスタートしており、既に第一弾はパーソナリティ心理学研究の 14 巻に掲載された（速水敏彦・小平英志「仮想的有能感と学習観および動機づけとの関連」）。その論文では仮想的有能感の高い人たちは努力を軽視する学習観をもちやすいこと、また、仮想型の人は自己決定理論に基づく動機づけの枠組みでは、特に外的動機づけや

取り入れ的動機づけなど自己決定性の低い動機づけが相対的に高くなることが示された。おそらく、仮想型は共感性が低いために人間関係がうまくいかない場合が多く、他者からの働きかけが内面化しにくいために自己決定性の低い動機づけに留まるものと考えられる。現在、さまざまな有能感タイプをもつ人たちが学習についてどのようなコミュニケーションを行っているかについても調査中であり、動機づけとの関係が明らかになるものと考えている。

以上の問題は仮想的有能感が規定するものについての検討であるが、第三は仮想的有能感の先行変数についての検討である。仮想的有能感はいかなる要因によってどのようにして形成されるのかについては現在のところほとんど手がつけられていない。「他人を見下す若者たち」でも指摘したように個人主義の浸透だとか、ITメディアの影響だとかいうような仮説はあるが実証的研究が必要になる。

さらにこの研究でもっとも難しい課題は、仮想的有能感を本人自身が無意識的なものとして定義しているが、無意識的であれ何らかの形で有能感に結びついていることを明らかにすることが肝心である。現在、投影法の技法を応用して瞬時的に生起する有能感を確認する試みを続けている。

上述のように様々な検討課題は残されたままではあるが、現代文化を反映する「仮想的有能感」という心理学的構成概念の提案は教育心理学や青年心理学の分野のみならず、臨床心理学や社会心理学の分野でも活用することで有益な心理学的知見が得られると信じている。

若者の仮想的有能感の認知と
怒りおよび悲しみの情動生起との関連

課題番号　15530423

平成 15・16・17 年度科学研究費補助金
基盤研究(C)研究成果報告書

研究代表者　　速　水　敏　彦

平成 18 年 2 月　印刷・発刊